

オーバーロードナイトスター

曳航彼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

未知を探検するギルド、ワールドサーチャーズのギルドマスターである偲はユグドラシルから『未知』の世界へと移動していた。彼はギルドの基本方針に沿い、世界を探検し、未知を追求し続ける。どんな犠牲があろうとも。

\*\*\*

衝動的に書いてしまった……。忙しいんで更新は遅いし完結させる気もそんなないので期待はしないでください。

# 目次

## 第一章：ワールドサーキャーズ

プロローグ

思索

望遠室

蠅

空中戦

復活

天使

ワールドサーキャーズ

## 第二章：白銀の冒険者

プロローグ

都市

冒険者

ダンジョン

王国

王国

依頼

旅路

旅路

薬師

森の賢王

v s ハムスケ

帰還

白銀の冒険者

108 105 100 96 90 82 77 67 64 57 50 45 40 37 33 28 22 17 13 9 5 1

# 第一章：ワールドサーチャーズ プロローグ

——〈即応反射〉、〈六光連斬〉

咆哮とともに、ガゼフは止めを刺しに来た天使を斬り払う。

だが、それらを召喚する魔法詠唱者マジックキャスターに肉薄する事は出来ない。いや、ついぞ出来なかつた、というのが正しいのか。

もはや身体は重く、部下は死んだ。武技を使えるのも奇跡のようなものだ。まもなく、ガゼフは崩れ落ちるだろう。

だが、こんな、自分一人の命の為に村をいくつも犠牲にする輩に殺されまいという矜持が、ガゼフを奮い立たせる。ガゼフが死ねば、後ろの村の住民は全て殺されるのだ。

自らの意氣に萎縮する敵の姿も、勝機が無い戦士に冷笑する敵の声も、彼には分からぬ。ただ戦意があつた。

だからガゼフは剣を振る。

〈即応反射〉、〈流水加速〉

そして——

\*\*\*

ある一つの人影がもう一つの影の横でみすぼらしい船を動かしていた。

彼が回す操舵輪はしかし、それに反して美しい芸術品としての意匠が施されており、中央の宝石がその価値を証明するように輝いている。

狭い船室の窓からは遠く下に、水晶のような輝きをもつ平原や、毒々しい色の沼地が見えていた。

ここに誰か居たとして、船が空を飛んでいる事に驚くだろうか。いや、そんな事はないだろう。なぜならこの世界はデータ——正確に言えば、今日サービス終了をする、DMMO—RPG、ユグドラシリーゲームの中なのだから。

一人で黙っているのも何だか寂しいような気がして、操舵輪から投

影された中空の地図を眺めながら、彼は横のN P Cへ向かい呟く。

「次はどこに行こうか」

勿論、N P Cは答えない。黙る以上に寂しい行為だつたような気がした。

彼——傀にとつて、サービス終了はそこまで大きなイベントでは無かつた。この船をホームとする、そして傀がギルドマスターであるギルドは、既に同じ名前、同じメンバーであるチームが別のゲームに作られているからだ。そちらのゲームでは傀ではなく、そのゲーム得意な別のメンバーが長を務めているのだが。

つまり、傀にとつて、そしてそれ以上に他のメンバーにとつて、ユグドラシルは既に終わつた物なのだつた。それなのになぜサービス終了時になつてインしているのかという理由は、このギルド『らしい』と言える物だ。

このゲームは傀がやつてきた中で初めてのD M M O — R P Gだつた。そして、サービス終了に初めて立ち会う事が出来るD M M O — R P Gだつた。だから気になつた。脳を専用の機械に接続するD M M O — R P Gは、サービス終了時どんな感じなのだろう、と。

普通に考えてログアウト時と同じ感覚なのは分かつていたが、D M M O ゲームは長寿だ、サービス終了の感覚を味わえる機会は少ない。これを逃す手は無かつた。公式の行うイベントにも興味はあつたしそれに、初めてこのギルドに入った思い出のゲームもある。

(それが一番大きいのかも知れないな……)

知り合いのギルドでも訪ねようかと沼地の見える窓に向けていた視線を、手元のコンソール……時計の表示されたそれへ移した。

2 3 : 5 8 : 4 9

訪ねる時間は無いようだ。

ギルドのランキングをコンソールを操作し表示させる。

ランキングに表示されたギルドのワールドアイテム保有数、メンバー数、P K レート等の数値を見たあと、ある数値を見て満足そうに頷く。

勿論、ユグドラシルというゲームの中でその顔は動かず、通常通り

——笑顔のままだ。

23 : 59 : 21, 22, 23, ……

ユグドラシルにおけるギルドの軌跡がなくなる、それなのに寂寥はそこまで持たなかつた。

それはまだギルドが終わる訳ではないからだろうか。きっと違つた。僕にとつて、これは足を踏み出したあと、反対側の足を地面から離すような物だ。

ユグドラシルから別のゲームに移行する時、僕は少し気がかりに思つた。まだやり残した事があるような気がして。それが今日綺麗さっぱり無くなるのだ。

23 : 59 : 51, 52, 53, ……

システムがダウンすれば、夜を更かして向こうのゲームで遊ぼう。今日なら色々閃ける気がする。

58, 59, ……

思わず、終了時間に合わせて目を瞑つていた。が、何も起こらない。これがサービス終了の感覚？

目を開ける。美しい操舵輪が見えた。まだ終わつていない。ふと見るとコンソールが消えていた。

「お」

お、公式が最後の最後にイベントを考えてくれたのかな、と声に出そうとして、最初の部分で気づいて、口を閉じた。そう、閉じたのだ。声を出す際に、口が開いたのだ。

汗で服が張り付くような感覚が肌を駆け抜けた。いや、実際にそうなつているのかもしない。ユグドラシルの機能になかつた筈の表情の動きが、今やあるのだから。

「有り得ない……」

いや、本当に有り得ないのだろうか？ 僕は疑問に思う。僕はゲームに詳しい方じやないし、自らの仕事によつて得た専門知識はこういつた技術には役に立たなかつた。もしかしたらサービス終了と見せかけてのサプライズ大幅アップデートなのかもしれない。

そうであれば公式から連絡なり来る筈だから、今は慌てず待機と

いつた所か。正直いって僕は浮かれていた。驚きはしたが、それは未知による物で、つまりそれは僕の脳内では期待感、わくわくに変わる。だがそれらは——期待感と驚きは、次の瞬間倍増する事になる。隣に待機させていたN P Cが、先の僕の発言に返答する事で。

「ああん？ 有り得ないって、何がだ？」

\* \* \*

エンリ・エモットは、村から遠く中空に浮かぶ点——船のように見えるそれを発見した。

## 思索

エンリ・エモットは村娘だ。薬師の友人と家族、そしてカルネ村のそれ以外の人間しか知り合いはない。知識は村の範囲を大きく逸脱する事はなく、そしてエンリの人生は今までの十六年間大きく変わらなかった。

だからこそ、エンリはこれから死ぬまでその人生は変わる事はないと考えている。

きっと、それは事実なのだろう。明日、エンリは死ぬのだから。今この時点でそう考えているのであれば、死ぬまでそのままでしかない。

だが、しかし——そんなエンリの人生で一度もなかつたような事が起きた。

それは井戸へ水を汲みに行つた時だ。水の入つたかめを持ち上げた時、視界に何か映つたような気がして、そしてそれは正解だつた。その名前をエンリは知らない。もしかしたら友人は知っているかも知れないが、彼は町に住んでいる。

次に来たら聞いてみよう、とぼんやり考えながら、エンリは宙に浮かんだそれを眺めた。あれはどうやつて飛んでいるのだろう。エンリは詳しくないが、もしかしたら魔法かも知れない。

そして次にエンリはこの光景が見間違いである可能性に気がついた。急いで目を擦つてみると、確かに空中に浮かんだ建造物は消えていた。

疲れていたのだろうか。確かに昨日はネムにせがまれて夜遅くまで童話を読んであげたけど。もしかしたら目の近くにちょっと大きな虫でも居たのかもしれない。

ちよつと嫌な想像をして身の周りを手で払う。取り落としてしまつたかめを取つて家に戻つた。  
それで終わりだった。

「ふう、誰かに見られてたかもしれないな」

\* \* \*

操舵輪——ギルド武器 ワールドサーチャ 宙空の旅色を操作して船体に透明化をかけた。

それは窓の外に見える、先程まで船の下にあつたユグドラシルの世界とは全く異なる、今や現実世界には自然に存在しない青々とした草原、そこにはぽつぽつと見える村が理由だつた。

今がどういった状況かはまだ分からないが、人工物が見える以上他の視線からは隠れるべきだろう。

それに、この時点で僕は一つこの状況を予想していた。——この世界はゲームの中ではないと。

顔の表情はゲームのアップデートという事でまだなんとかなるような気がするが……

「あん?」

……顔を向けると、眼ガシを飛ばされた。

とは言つても、そこまで怖くはない。というのも、ワールドサーチャーズは世界を探検するギルドだが、その分ギルド強化にはそこまで力を費やさなかつた為に、強いNPCは数える程しか配置されておらないのだ。そして目の前にいるウルのレベルは五十程度でしか無い。まあ、ゲームでもない世界でレベルや戦闘の事を考えるのも馬鹿らしい話だが。

そう思い、少し先程までの好奇心に冷水をかけられた心地がしながらウルを見返す。

NPCが会話をしてくれる。こんな事はユグドラシルでは有り得ない。あのギルドのギルド長である僕がそう考へるのだからそれが覆される可能性は低いし、そしてそういつたアクションを設定する事が可能だとしても、またはアップデートで可能になつたとしても、設定した覚えなどなかつた。

それに、現在のウルの行動はNPCとして込められた設定と一致している。曰く、ウルはギルドメンバーにタメ口で、友人として接する、と。

「……なる」

余り確証がある訳ではないが、僕はおそらくそうだと頷ける答えを見つけた。

——仮想現実が現実になつた、という理不尽で意味のわからない答えを。

もちろん、船の外がユグドラシルでは見ない光景な以上は、それだけではないようだが、この船、いやもしくは僕とウルのいるこの船室は僕の見覚えのある物なのは間違いない。とすると、先程のレベルや戦闘力についての考え方……的外れではない？

「は？」

先程の呟きに反応するウルを、僕はもう一度眺める。

戦闘力など関係なく、ウルの翡翠色の眼光には震えてしまいそうだ。なんせこのウル、余りにも目つきが悪い。いや、身体全体から暴力的な空気が滲み出しているとでも言おうか。長く伸ばした赤髪は艶やかに輝き、細いながらも毒々しい藍色に染まつた首輪は明確に己を主張していたが、それらは同時に相手を不安にさせる類の美しさだ。棘のある薔薇どころか炎のような美しさと言えば分かりやすいか。

むしろ、それに動じない僕の胆力が優れているという物だ。いや、本当にそうなのだろうか。

これは脳をコンピューターに接続するという形式のゲームで起きた異常だ、何らかの精神的異常が起きていても不思議ではない。

実際、今の自分の冷静さは異常であるかのように思えた。

「おい、結局有り得ないってのはなんだってんだよ」

ウルの小突くのに、僕は窓を指差してやる。なぜかこちらが答えを全然返してない割には親しげな表情をしているが、僕としては初対面——いや、船を動かす時に何度も見た顔ではあるが——初めて話す人なのだが。

そして、ウルは目つきのせいで分かりづらいが、驚いた顔をしたようだ。

「あ？ 見た事ねえ、こんな所……。それにさつきまでヘルヘイムに居たはず……転移したのか？」

「いや……少なくとも僕からはやつてないですね」

初めて話す人だ、仕事の癖で敬語になつてしまふ。

それと分かつた事が一つある。ウルだけかもしれないが、N P Cは動き出す前……ユグドラシルの中での記憶を保持しているらしいと いう事だ。

という事は……

「なあ、ヒ——」

「ちよつと待て——待つて下さい。僕の事は傀つて呼んで頂けませんか。ウルが知つてる名前では呼ばないで」

「ええ?」

「お願ひします。……ホント、マジで」

ユグドラシルでのH Nはギルドメンバーからよくからかわれた物だつた。気にしていない風を装つて、サービス終了の今まで変えないでいたが、今だつて根に持つている。

「ええつと……傀? ていうか、これは他のヤツにも言つておいた方が良いのか?」

「それは誰を想像して言つてるんでしょう」

「え? そりやあ、ティアマトとか、ベルザンディとか?」

「うん……まあ、そうしてください」

他のN P Cも居るらしい。

そうなつてくると——

ことここに至つて、傀は自分の考察が限界を向かえている事を知つた。だから。

「ウル。船長として、副長ティアマトを呼んでもらえませんか?」  
調べよう。魔法、特殊技術、アイテム、そして……この飛空艇ダンジョンホームがどれだけ機能するのかを。

## 望遠室

望遠鏡を覗きながら、僕は大都市のその光景の壯觀さに思わず感嘆の溜息をついた。

それは現実世界では人間の手入れなしで見られない光景——植物に溢れ、生態系も豊かな大気汚染のない世界を見た事だけが理由ではない。現代とは違う、中世独自の街の作りや文明は年齢相応の僕の好奇心を刺激していた。

ユグドラシル内でこの望遠鏡を覗いて見る事が出来るのは遠方でのリアルタイム映像を二次元的に表示させるディスプレイでしかなかつたのだが、そのような方法では有り得ない程の解像度と立体感で示された遠方の景色は、この世界がゲームでなく現実である事を如実に強調しているようと思える。

そして——僕は望遠鏡を別の方角、それも先程充分に見た筈のそれに向け、呟いた。

「やつぱり——天空城だよな、あれ」

ユグドラシルにおいてアースガルズに位置したダンジョンが、砂漠の中で君臨していた。天空城の名の通りその城は空中に浮かんでおり、その下には城下町というべき都市が城から流れる川を挟むように作られている。周りが砂漠である事も相まって、規模の小さいアーロジーのような印象を僕に抱かせた。

「別のプレイヤーもここに来たのか」

最初に見て思つたのはそんな事だ。

ギルドホーム系ダンジョンに攻め込む時に選択肢として上がったダンジョンな事もあつて、天空城の事はサービス終了時に久々にログインした僕でも覚えている。

この飛空艇が自らとともにここまで転移してきたからには、あの天空城にもプレイヤーがいると考えてもいいはずだ。

「なら……飛空艇の進路が決まるな」

情報も足りない未知の中、同じ現実世界の者として強力するのが方策だろう。

僕は額を揉みながらそう考えるが、目は望遠鏡を注視したままだ。その理由は、その天空城の城下町、その外縁——そこでの人間の出入りだ。

その人間達は、天空城に存在する天使系や聖職者系の——僕が先程まで相談事をしていたティアマトのような——NPCやポップモンスターでは明らかに無かつた。

つまり、おそらくこの世界の住人なのだが、先程転移してきたダンジョンに彼らが出入りする理由はなんだろう。まさか――

「戦争?」

攻め込まれている、という発想はあまり的外れではないように思えた。そういうえばこの飛空艇は転移して少ししてすぐ透明化を行つた訳だし、それが無くとも僕のギルドの発見した様々な情報を<sup>よう</sup>擁するこの船はある意味情報保護魔法の塊だ。だからこそ飛空艇は気づかれず、逆に余りに目立つ天空城は攻め込まれていると考える事は出来た。

僕は考える。この世界の住人はどれくらい戦闘能力があるのだろう、と。

NPC、モンスター、魔法、特殊技術<sup>スペシャル</sup>、道具に魔法道具<sup>マジックアイテム</sup>、アイテムボックスにギルド武器の確認は終わつた。ゲームから現実に変わつた事による仕様変更はあるらしいので実験の余地はあるが、それは後々<sup>のちのち</sup>ギルドとして大々的にやつていけばいい。だが、それらのほとんどはユグドラシルと同じだった。ユグドラシルとこの世界では法則が同じで、住人もそうだと考えると――

「まあ、ワールドアイテムはないにしろ……普通に考えるのなら住人皆100レベルとかなんだろうな」

ユグドラシルというゲームはレベルを上げる事が容易な方で、大体のプレイヤーは100レベルに到達していた。これは戦闘を基準にビルドを考える系のプレイヤーからしたら好ましいシステムだったが、住人全てがプレイヤーと判定されるとしたらここはユグドラシルの九つのどの世界でも考えられない程難易度の高い世界ということになる。いや、とギルド内で行われ、そして中断された127レベル

計画を偲は思い出す。ここが現実であるならゲーム的都合であるレベルキヤップなど解禁されているのだろうし、それを考えれば天空城は即座に占拠されるだろう。それも既にされていない場合の話だが。といつても、城下町に行き交う人々は望遠鏡からの景色を見るに、そこまで強くない気もした。

「まあでも、まだ行かない方が良いんだろうな」

勿論興味は尽きないが、危険を晒す程ではないと考え、そこで偲は望遠鏡での偵察を止めにする。書机を見て偵察した地形の地図が書かれている事を確認して、立ち上がった。

ここは望遠室だ。

偲のギルドはそこまで戦力的な意味で強いギルドではない。ギリギリ城クラスと認められやつとN P Cを配置できる程度の飛空艇をギルドホームとしている事からもそれは分かるというものだ。だがその中でもギルド内で重要視されている部屋などは一級品の設備が整えられている。

その三つある中の一つである望遠室は、いわゆる物品としての高価さは感じられないが、深い知識を感じられる高貴さを雰囲気に宿すようだつた。

先程まで偲が目の前に座っていた望遠鏡や書机と羽根ペン、そしてその上にある地図に、望遠室のかけ持つ作戦室としての役割を示している、望遠台に隣接した円卓や作戦記録を蔵書した本棚。これら全てに魔法的な輝きがあつた。

この部屋自身にも魔法がかけられており、室内への転移を封じるものや、防御魔法、特殊な物であれば空間を制御する魔法があり、これは部屋の座標的な位置を上下させる事で望遠鏡で見る事の出来る範囲を広げるための物だ。

それを証明するかの如く部屋の小窓より見える景色は飛空艇の存在する領域よりも遥か高高度からの物だ。

偲は扉からでなく、その小窓から望遠室を出た。

\*\*\*

少女とそれより幼い少女——エンリとネムを前に、全身鎧に身を包

フルプレート

んだ者は剣を振りかぶった。

一撃で命を奪うのが慈悲であるといわんばかりに、大きく振り上げられた剣が日差しを反射しギラギラと輝く。

エンリは目を閉じた。その下唇を噛み締めた表情は、決して望んでの姿ではない。ただ、どうしようもなくそれを受け入れたに過ぎない。もし何らかの力があつたなら、目の前の者に叩きつけ逃れただろう。

しかし——エンリに力は無かつた。

だからこそ結末は一つ残されていない。

剣が振り下ろされ——

エンリ・エモットは死亡した。

小窓から望遠室を出た僕は落下していた。当たり前だ。船室の一つとはいえ、魔法で空間を歪められた望遠室の窓は船の側面ではなく高所に繋がっている。

だが、僕は焦らない。なぜなら――

落下する僕を見て、勘のいい人物なら気付く事が出来るだろう。そのスピードが落下するにしても速いという事を。

落下は、飛空艇の視認ができる高度にまで到達すると止まった。僕の肉体が空中で滯空しているのだ。

僕は一人領く。

ユグドラシルでは操作性が悪く、戦闘に組み込める事自体がアドバンテージとされていた種族的な飛行能力はまるで二つの足で歩くかのごとく、かなり使い勝手が良くなっていた。戦闘に組み込めるプレイヤーの一人だった僕としてもこれは嬉しい。組み込めるとは言うものの、どちらかと言うなら地上の方が戦いやすいのは僕であつても同じだからだ。

このように、特殊技術(スパシカル)はゲームの時から現実になるに至つて変わつていた。もしかしたらそもそも使えない物もあるかもしれない。

いくつか実験はしたが、今の所まだ僕の持つ全ての特殊技術が使えるとは言えなかつた。というのも、僕は自分の持つ特殊技術が何のかをうろ覚えでしか把握していないのだ。サービス終了の日にユグドラシルにログインしたのが久々の為だ。

勿論自らの職業、幸運な戦士(ラッキー・ウォーリア)、幸運の騎士(ナイトオブフォーチュン)、星の騎士(スターナイト)、反撃者(ヴァンジアンサー)の特殊技術などは覚えているが、種族的な特殊技術や装備品の効果も使用頻度が低かつた分覚えておらず、実験が出来ないでいた。勿論ギルドメンバーの各自がしているように、自らの百科事典(エンサイクロペディア)に書き込んでいたはずだが、だからこそ確認すべき事があつた。僕は浮遊しながら飛空艇を見つめる。

錨を下ろしていない飛空艇は当然のごとく僕が窓から降りた時の

位置から離れていいっている。これは急がなければ、僕は自らが特定領域内に居なければ使用できない特殊技術の一つ、〈要求〉を使用する。

この特殊技術は、〈暗示〉<sup>サジエスチヨン</sup>を込める事が出来るという利点はあるが、ほぼ〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>の魔法と同じ効果を持つ。つまり、遠方にいる人物と話が出来るという事だ。この特殊技術はクールダウンが恐ろしく早く連続的な使用をしないのであれば、いつでも使えると言つてもいい程度で、その為にとりわけ飛空艇内にいる時は仲間との連絡に重宝していた。

魔法的な糸が繋がつたような感覚とともにウルの声が聞こえる。

「僕、どうした？」

「ウル、今から飛空艇に探知魔法をかけるから、今攻性防壁が発動しても気にしないでくれ」

「ん？ 攻性防壁の点検でもすんのか？ てか、さつきと喋り方違くね」

「今は色々な物品を点検してるんだ。詳しくはティアマトに聞いておいてくれ。喋り方は……まあ」

僕は思い出す。ティアマト含む出会った飛空艇のNPCやモンスターの数々の態度を。

重苦しかつたのは当たり前の事と言えるだろう。

僕の家に毎日来てもらっている家政婦や近所の女性を何となく思いださせる。何かをする度言う度褒め称えられるのはまさにそれだ。馬鹿にしているのかと怒り散らしそうになるが、彼らは本気でそれを言つているようなのだ。それに現実世界のおばさん達とは違い、彼らは褒めているのではなく信じている。僕が絶対の主人である事を変に態度を崩せる訳がない。

これからある程度飛空艇の中では過ごす日々が続くだろうが、その中で彼らのような忠臣とのみ話していたら確実に重圧が僕を押しつぶす。だから早急にタメ口で話せる関係を作りたかったのだ。

「オーケー、言い含めておくよ。僕は飛空艇の中に居る訳じやねえよな？」

「勿論。今は飛空艇の外の空中に居る。僕への攻撃で飛空艇がダメージを負うことはないだろ」

「アイアイサー」

「要求」が切れる。

誰かに——そうだ、ウルズにでもしておこう——〈位置同定〉を発動する準備をしながらそれと同時に、来るであろう攻性防壁——設定されていたのは僕の記憶では第十位階魔法〈蛆蝇托卵〉と第九位階魔法〈虚偽情報・状態〉だつたはず——に対して、召喚されるモンスターへの対策と実験用に魔法を準備する。わざわざ準備するのはモンスターを瞬殺する為だ。実験とはいえ戦闘行為を行う意味は無い。

これから行うのは情報保護魔法の実験だ。正直言つて、この飛空艇に関してこれ程重要な物はない。百科事典にはギルドが調べた様々な職業や種族に関する情報を書いてあるが、当然ながら自分達の取得したクラスが最も詳細に書かれている。もしこれらが漏洩したら完全に弱点を晒してしまう事になるだろう。

実際、一度そんな事が起きてギルド全員がキャラ構成を完全にやり直さなければならなくなつた事がある。あの時は僕のギルドの中で最初で最後の全面戦争になつた。

そんな事を起こさない為にも、この実験は必要という事だ。

「位置同定」

全ての準備が終わつて、情報系特殊技術を発動する。この特殊技術も〈要求〉と同じく特定領域内でしか使用できないがクールダウンが早い。

設定された偽の情報と、そしてそれと共に、飛空艇の攻性防壁が——

「あれ？ 来ない？」

朝日の見える静かな空中で僕は呟く。どちらかというと機能すると予想していたのだが。

ギルドメンバーのかけた攻性防壁だからという理由ではない。ユグドラシルならそういつた事が起きたのだが、この世界では自らやその味方の使つた対敵用の魔法でも効果を受けてしまうのは実証済み

だ。

では——、と考えている間に種族的に特殊技術として常備されているトゥルーシーライングの「**真実の目**」と、それだけでは第九位階魔法の情報系魔法は破れない為に自らに使つた第九位階魔法「**グレーター・シースル**」を適用されている自らの感覚に、身体の異常——虫が身体の中で転げていてるような——を感じする。

偲は気づいた。

「……性格が悪いんだよ」

勿論、それを設定したのは偲含むギルドの決定だったのだが。

そういえば、「**蛆蠅托卵**」には魔法遅延をかけるという事だつた。つまり、一旦攻性防壁がなかつた物と思わせて、油断のした所に、とう訳である。

現に偲はそれに引っかかり、準備を無駄にして「**蛆蠅托卵**」の完全成就をさせてしまつた。偲は目を見開く。

苦しくなり、吐きそうになる。喉にかさかさと何かが蠢く気配を感じたからだ。そして、唇に虫の節足が触れるのが分かり、そして吐き出した。

偲としてもこれは予想外だつたため、口の中にあつた感触を消さんと、何度も嗚咽をする。ユグドラシルではこれらは全て演出で、実際の効果はない筈だつたが、現実世界ではそもそも行かないらしい。当然、ユグドラシルでプレイヤーにショック——それも精神的な——を与えたのは間違いないが。あらゆる戦法がいやらしい事で有名などあるギルドのホームダンジョンでは、そういういたショックを与える目的でこういった魔法や特殊技術を使うN P Cが居たらしい。

そんな事を考えながら偲は目の前のモンスターを見る。まさに巨

大な蠅といつたような風貌をしたレベル93の虫系モンスター、  
ベルゼビュートの王を。

## 空中戦

「蛆蝇托卵」はかけた相手の体内に蠅の王の卵を植え付ける魔法だ。その卵は成長し一分程で成虫状態になり対象の口から吐き出されマジックキャスター。魔法詠唱者の指示を聞かず、魔法をかけられた相手とその味方への戦闘行為以外に行動を取らせる事が出来ないという欠点はあるが、演出を含め最も警戒されている魔法の一つだ。

もちろん、対処法はある。が、それはユグドラシルというゲーム内では難しい物だ。

卵時点での蠅の王の全てのステータス値はユグドラシルの中で最も低い。もちろん一分で93レベルにまでなるのだから成長速度は恐ろしく速いが、卵時点での攻撃をしかければ簡単に倒せる。だが、攻撃手段は魔法をかけられた対象に傷をつける事。味方に攻撃が出来ないユグドラシルでは自傷が対価となる魔法や特殊技術特殊スキル、または一般的な手段としてアイテムが必要になるが、この世界ではどんな行為でも自傷が可能だ。卵時点の蠅の王はレベル100の魔法詠唱者であればマジックアロー「魔法の矢」だけで倒せるだろう。実際、魔法封印で偲の待機させていた魔法はそれだ。ついでに、もしもの時を考えてこの空間全体に効果範囲拡大化した「秘密の空間」を使用した為、これから戦闘は他の住民には見えない。

偲はまるで昔の記憶を辿るかのように蠅の王のデータを思いだす。卵時点での対処は困難だが成虫の蠅の王もかなり面倒な敵だ。まづ自分の特殊技術と魔力が尽きるまでシモベを召喚し、次に指揮官系の特殊技術でシモベを強化。蠅の王へ直接攻撃出来るまでに盾としてのシモベが減れば今度は残存しているシモベを全て食し魔力と特殊技術を回復し、始めからやり直しだ。

少なくとも一人で戦いたい相手ではない。

朝時の紫がかつた空に早速溢れんばかりのシモベを召喚しだす蠅の王に、偲は虫系モンスターに有効な炎属性の魔法の中で最高位の物を繰り出す。

「魔法効果範囲拡大最強化・神炎」

威力にカルマ値を参照する魔法だが、僕のカルマ値であればこの魔法の最大威力を引き出せる。

その筈が――

「倒れていない?」

シモベ位であればこの魔法で一掃出来るはず――と考え、向かつてくる小さい蠅の王のような見た目の筈のシモベが通常より赤みがかつてている事に気づき、僕は理解した。

蠅の王の指揮官系特殊技術へ延<sup>フライアスブレッド</sup>焼<sup>ド</sup>だ。この特殊技術の効果中、対象のシモベは与えられた炎系ダメージを効果解除時まで蓄積でき、そしてもし誰かに物理ダメージを与えた時は、蓄積した炎ダメージをそのまま相手に与える事が出来る。だからこそ、シモベは僕へ突進をしてくるのだろう。

ただ、僕にとつて重要なのは蠅の王の行動指針の違いだ。ユグドラシルでは、魔力の残っているこの段階では指揮官系の特殊技術は使わなかつたはずだ。それが違うとなると、モンスターも機械的な行動でなく自分の意志があるという事になる。

「面倒だな」

そう言い、僕は対象を自らの指揮下に収めるへ上位命令<sup>グレーターコマンド</sup>を使つてみるが、すぐそれも蠅の王に解除される。が、それで充分だ。一瞬だけ僕の指揮下に入ったシモベ達はそこを通り過ぎる主人を止める事が出来ない。

僕は幸運の騎士<sup>ナイトオブフォーチュン</sup>などの軽戦士<sup>ファンサー</sup>系――正確には魔法戦士系だが――の職業をいくつか取つていた。そういう職業である事や、種族や装備した世界級アイテムなどもあって、隠しステータスを除外すれば素早さが全ステータスの中でも最も高い。だからこそこのように僕は蠅の王に肉薄出来る。

蠅の王は93レベルにしては魔力が多く素早さが高く、そして魔法防御が少し高い程度の、いわば『行動が少し面倒』というだけだ。

だからこそ、自らの盾たるシモベを生み出さず指揮官としての役割を優先した――ユグドラシルのプログラムと違う判断は逆に言えばありがたかった。ユグドラシルのプログラムはある意味最適化され

ていたのだろう。その点で、蠅の王は誤った訳だ。

なぜなら――

僕は蠅の王を蹴る。その方向は延焼状態のシモベ達の方向。

僕の記憶にない特殊技術が乗ったのか、予想以上にノックバックした蠅の王は、延焼を受け、その身を神炎によつて焦がされる。味方の攻撃が当たるという事はこういう事だ。やつと見る事が出来た神炎の神々しい直撃エフェクトに自らの作戦の成功を快く思いながらも、僕は手を止めない。

「自然淘汰」

四十個用意されているフィールドエフェクトに似た効果をその中から一つ選び使用出来る第七位階魔法だ。選択したのは大嵐。<sup>スペーサイクロン</sup>嵐に巻き込まれ、シモベと押し合いせめぎあう事による物理ダメージから、神炎を食らい続ける蠅の王を魔力の精髄<sup>マナ・エッセンス</sup>の視力で見て、僕はそろそろだな、と感じた。

蠅の王の魔力が無くなつたようだ。つまり嵐に巻き込まれながらもシモベを召喚しつくしたらしい。おそらく延焼に対する肉壁の目的もあるのだろうが……。と、僕はシモベの数が減少している事にやがて気づき、驚く。

召喚したはずなのにシモベが減少しているのは恐らくシモベを代償に蛆蠅托卵と同じ行為が出来る同名の特殊技術の結果だろう。だが蠅の王がこれを使う機会は基本的にユグドラシルには無いため僕は忘れていた。その上、僕の感覚にその状態異常を自らがかかる事は感知されない。つまり、その魔法にかけられたのは僕ではなく――

「シモベか！」

味方への攻撃が可能な中でそういつた発想を持てなかつたのは迂闊と言えるだろう。何故なら特殊技術で召喚された蠅の王は魔法でのそれとは違い、特殊技術の使用者の命令を聞くからだ。

といつても、それは驚異ではない。シモベには大嵐のダメージが持続して与えられているため、蠅の王の卵は破壊されているはずだからだ。それを考えると自然淘汰を使用する直前に特殊技術の蛆蠅

托卵〉を発動したのだろうから、忘れていた物を思い出せた事も相  
まつて、偲は幸運だつた。

「幸運の騎士だから運がいいのかな？」

それは実験の余地があるだろうが、蠅の王の魔力が無いため、後は  
蠅の王には指揮官系の特殊技術と魔力と特殊技術を回復する特殊技  
術〈共食い〉しか無い。ここがチャンスだ。

〔魔法神話三重化・神炎〕

魔力だけでなく神話値を消費する事で無効化含むほぼ全ての抵抗  
を貫通する魔法強化を用い、恐らく延焼をかけられているだろう向  
かってくるシモベに対しその効果をすり抜けさせる。シモベは一匹  
残らず一掃された。

そして、自らへの強化魔法を存分に使つた後、偲は短剣を抜くと蠅  
の王へ接近する。魔法防御が高い代わりに全体的に肉弾戦の心とも  
ない蠅の王には接近戦が有効だ。

偲は蠅の王を切り払う。神炎によつて残存HPが少なく、一撃だつ  
た。

\*\*\*

ふう、とニグンは息を吐く。ガゼフを殺した後、ガゼフが囮になり  
逃がそうとした数名の生き残つていた村の住民は全て部下に殲滅さ  
せた。これで自らの任務は成功と思えば安堵と達成感の帶びた溜息  
も出ようものだ。

ニグンは部下に死体の回収を命じようと、息を大きく吸う。が、直  
後に起きた現象への不信感により、別の発言をした。

「どうしたお前達！ 命令外の行動をするな！」

自らの部下達が皆一斉に村のある一点を目指し走つてゐるのだ。

陽光聖典隊長である自らの命令を無視する程の、ニグンの気付いてい  
ない異常事態？ そう考えるも、部下達の顔が否定する。

彼らの顔にあるのは焦燥ではなく歓喜。そして、奇妙な事に彼らは  
上を向き神への祈りを示し手を組んでいるのだ。法国のため、そして  
引いては神の為たる我らの工作任務を指揮するニグンの命令を無視  
しているのにも関わらず。

理解出来ない状況に苛立ち、ニグンは部下達を追いかけた。

\* \* \*

蠍の王を倒し、飛空艇の情報防衛が今でも機能する事に安堵した僕は、飛空艇に戻ろうとする。飛空艇は錨を降ろさないと停止する事が出来ない代わりに動きはかなり速いのだが、僕の高い素早さなら追いつく事は出来る。このまま飛んで行こうと僕が思つた時、ふと眼下の光景が目に止まる。

戦闘中に少し移動してしまったのか、いつの間にか下には村があつた。それも、戦闘行為により殺されたのだと思われる戦士の死体が多く残つた村が。

## 復活

僕は眼下の村へ降下する。勿論、〈秘密の空間〉の効果範囲は魔法範囲拡大化や種族的な特殊技術<sup>(ス・キ)ル</sup>によつて拡大されているが、地上まで広がつてゐる訳では無い為、天空城のように攻撃を与えるられないようにな程までしていた警戒を考えれば本来それは愚行であるはずだが、僕はその事を忘れていた。

村が近づいていく程、戦士達の死体の様子は明らかになつていくようだつた。この世界に来てから優れた感覚を持つようになつた僕は高層ビルの屋上程の高さからでもその死体の詳細が見て取れる。

その死体の装備は様々で、非常に使い込まれた物なのが装備の能力や特殊技術を使用しない僕の視界でもよく分かつた。全員が屈強な肉体を持ち、そして全員が死んでいた。特に屈強な一人の死体だけが、死んでいるかを入念に確かめられたかのような数々の刺し傷が残つていたが、特別な物はそれだけだ。他の死体は全て、悪平等な“死”が通り過ぎたかのように村の外れの草原に横たわつていた。

彼らが盗賊団のような悪をしでかした者かどうかかも分からぬ。傭兵のような見た目からしたら仕事に殉じただけかもしれない。もしかしたら自らの存在に気づかれれば僕もそうなるかもしれない。だが、僕は恐怖も義憤も覚えず——ただ“哀れ”に思つた。

だから……先程の戦いで第十位階魔法を多数使用した事による魔力の喪失を頭で感じていながらも、躊躇いもせず、魔法を使つた。

第九階位魔法、〈集団蘇生<sup>(マス・リザレクション)</sup>〉を。

\* \* \*

痛みが響いていた。

それが誰の物かも分からぬ。  
誰がそれを与えたのかも分からぬ。

水面に浮かぶ荒波のように、消えては浮かんしていく。

それをかき分けようとする試みはもうとつくに諦めていた。

浮かび上がり、そこから離脱したいように思えた。

そう思う理由は痛みで、そう思つてゐる者も痛みだつた。

痛みは、沈んでいく。

だが、それを掬<sup>すく</sup>う大きな手があつた。

自らを引き上げようとするその手を、痛みはなんて優しいのだろうと考えた。

痛みが願う事を叶えてくれるなんて、なんて慈しみを持った手なのだろう。

自分が選ばれたかのように思えて、痛みはこの手を、尊い物のように思つた。この手が汚れるくらいなら、痛みが汚れよう。どうせ、痛みなのだから。

そして——再び、痛みはガゼフ・ストロノーフの形をとる。

\* \* \*

「何してんだよ」

その声を聞いて、傀は隣にいるウルの存在に気がついた。

ウルは純粹な人間である為、空を飛べない。その為傀の隣に立つことができるているのは、飛空艇に備えつけられた小舟に立っているからだ。

飛空艇のギルドホームダンジョンとしての収入源である“略奪”的のアイテムだが、そういうればこの世界では略奪はどういった扱いなのだろう。そう考えながらウルの質問に傀は答える。

「何って、蘇生んだけど?」

「そうじやねえよ。ティアマトから聞いたぜ? ついでにお前を外に出した事叱られたけど。てめえ、俺達の存在は極力隠すんじやねえのかよ、秘密の空間から離れやがつて。ほら、この世界の住民が駆けてきてるじやねえか」

見ると、武装を統一した兵士が数多くこちらへと来ている。傀へ向かってきているのは間違いない。

「まあ、仕方ない。弱き者どもを慈しみ、そして哀れみ助けを施すのは私達の——あ」

そこで、傀は自らの異変に気づいた。

口を抑え、自らの言葉を塞<sup>ふさ</sup>ごうとする。そうすれば自らが元に戻るというように。

ウルの訝しげな顔を無視し、偲は思考する。いや、思考するまでもない事の筈が、結論を出したくないが為に、思考という過程で時間を稼いでいるのだ。だが、それも数秒程度の差しか産まない。

現実世界での偲は、先程のような鼻につく偉そうな考え方などしなかつた。これが偲の素ではなく、そしてこの世界に来た事による影響なら――。

まるで土が強く押されるかのような音が数多く響く。偲がそちらの方を見ると、復活していた戦士達と、こちらを向かってきていた兵士が草原に並んでいた。それも、膝を付き下に向く、まるで臣下のような姿勢で。

「なんだ……これ」

そうは言うものの、答えは即座に返つてくる。

「そりや、お前の特殊技術だろ。ギルドが船に襲つてきた時にお前、使つてたじやねえか。自分の特殊能力も忘れたのか？」

返答をしたのは、飛空艇の船長――偲のギルドが攻略した飛空艇、その元ダンジョンボスという設定の――ウルだつた。

それで偲はその特殊技術を思いだす。自らの物覚えの悪さに呆れそうになつたが、まあ仕方ないかと思いつつ、それは特定レベル以下のモンスターが自らに敵対行動を取る事が出来なくなるという、モンスターを無視する為の便利系パッシブ特殊技術でしかないのだから。「信仰のオーラ」か。戦士の皆さんは救世主の効果もあるらしいけど

「信仰のオーラ」は最上位の信仰のオーラVなら偲が最大限特殊技術の強化をすれば100レベルの悪系種族でさえ精神系バッドステータスを与える事もできる特殊技術シリーズだ。だが、現在偲が発動出来るのは最大でも信仰のオーラIIのはず。それによつて人間種が敵対行動を取つていなのはつまり――

「この兵士達は30レベル以下、か」

「らしいな」

偲は100レベルどころか予想より低い事に安堵する。いや、ここは聞いておくべきだろう。

「君たちはこの世界ではどれくらいの強さなのかな?」

「はっ! ドラゴンのようなモンスターや生まれもつた能力を持つ亜人種等の例外はござりますが、周辺国家の人間種では高位の戦闘力を有していると自負しております。ですが勿論、天使の中でも最高位に属していらっしゃいます貴方様には叶うべくもございません!」

命令にも従う。どうやら25レベル以下であるようだ。といつても、偲はそれを気に留める余裕は無かつた。

というのも。

「なんで僕の種族がバレてんだよ」

「さあ?」

〈信仰のオーラ〉は、あるレベルより下のモンスターの自らへの敵対を不可能にするが、ボーダーラインのレベルよりもさらに5レベル以上低いのであれば別のプレイヤーのシモベでない時には何の抵抗もなく自らのシモベとする事が出来る。逆にボーダーラインのレベルより高くとも、5レベル以内の差であるのならバッドステータスを与えられる。

もしかしたらシモベには主の記憶が一部あるのかも知れない、召喚したモンスターにわざわざ事情を全て説明するのも馬鹿らしい事だろうから。これも実験だろう。

偲は戦士達の方へ目を向ける。

「じゃあ……君たちは?」

「はっ。私どもも周辺諸国人間では強者であると思われます。先程情けない姿を晒してしまったのは我らの得意な近接戦を防がながらの戦いであつたからである為、私どもの力の無さを示す物ではないと愚行します」

うーん、と偲は悩む。

戦士達の場合は、自らの復活させた相手へバフを与え、自らの精神的バフの影響を高める、死亡したプレイヤーへの戦線復帰用特殊技術〈救世主〉がある。この場合、精神的バフと判定される〈信仰のオーラ〉に対するブーストがかかっている為、レベル考察がしづらい。だがどちらにせよ、彼ら程度が強者であるのは間違いないようだ。

「ありがとう、じゃあ……うん、どうしようかな」

「その前に傀、あの男はどうするんだ?」

「ん? ああ」

\*\*\*

ニグンは目の前の光景を信じる事が出来なかつた。

ニグンの見上げる空に居座るのは二人の男。

一人は空飛ぶ小舟に乗り、鮮血に似たその髪の色とその縁に輝く眼球が荒々しい気配を漂わせている赤髪の男だ。そしてもう一人——赤髪の装備と純粹な能力は両方とも英雄級とさえ目される筈のニグンよりも優れているように思えたが、その男……少年と比べれば全く及ばないようと思えた。

『それ』は、珍しい南方系の、濡れたような黒髪の少年のようにニグンには見えた。意味のとれない文字が所々に書かれたその身に纏う布鎧の白銀の生地は、見たところ、ニグンが見た全ての物よりも……いや、今までに見た全ての物の価値を足し合わせてさえ届かない程までに価値が高い。

実力も得体が知れないという言葉がよく似合う。戦闘能力の強さというのは往々にして強き者によつて感知される物だが、少年の姿にはそれが無いのだ。それだけならまだ良い筈だが、相反して少年の姿が行う一挙一動作は熟練の戦士のようなそれ。

そして何より奇妙なのは自らの部下と、恐らくそれに蘇させられたのだと思われるガゼフ・ストロノーフのその部下が、それを天使として崇めているという事だ。

もしそれが事実だとしたら、ニグンがそれを崇める事もなく天使だと思えさせしないのは何故だろう。

それは——、と考えてニグンは顔を青くする。自らの信仰が足りなかつたのではないかと思つてしまつた為だ。

自らの信仰が不十分であり、部下の方が敬虔な神の下僕である。それを否定する根拠がどこにあるだろうか。

ニグンは首を振つてその考えを振り払う。そんな筈がない。これまで六太神の為に様々な亜人を殲滅した。そのような事があるはず

がない。

だとすると、まさか少年の姿をとつたそれは神と同格の存在ではないだろうか。それらの存在が彼らに精神支配をかけているのならばニグンだけが正常であるのも理解できる。

神と同格の存在として大陸では三つの例が上げられる。六百年前に現れた六大神、五百年前の八欲王、そして百年前の。

「あの男はどうするんだ？」

「ん？ ああ」

気づかれていたようだ。

ニグンは緊張に懐のそれを強く握りしめながら、だが情報を手に入れる為その存在の元へ歩き出した。

## 天使

こちらへの従属を示さない。こいつは30レベル以上？ ユグドラシルと信仰のオーラの効果が全然違うから、レベルが分かりにくいな。

そんな意味の分からぬ喰きをする少年の姿をとつたそれに対しニグンは歩む。

「君達と同じ服着てるけど彼は何者？」

「はつ。我々の指揮官だつた男、陽光聖典隊長ニグンでござります」部下である副隊長がニグンの立場を過去形で語る。いや、事実その通りなのかもしない。部下の全てを掌握された今、隊長という立場に中身などあるものか。

それは副隊長への質問を続けた。

「ん、聖典？ 君達は聖職者なのかい？」

「ええ、スレイン法國における六つの聖典は全て貴方様、そして引いては神の従順なる下僕でございます」

ふーん、じゃあさつきの想定よりレベルが高いのかも知れないのかな。

そうそれが呟くのに続けるように、副隊長が倒れる。

その現象に対しニグンに疑問は無い。精神支配などによる情報漏洩に対し対策がされているのは当然の事だ。これまでの何度かの質問が引き金となり、副隊長は死んだのだろう。

だが、では自らが原因となつた、自らを天使と崇める人物の死亡に、それはどのような反応を示すのか。

「ん？ え、死んだ……。なんで？ 即死魔法？」

「情報関連の魔法なんじやねーの」

「口封じつて事？ あー、ユグドラシルに無い魔法もあるのか。なら仕方ない。〈下等生物排除〉があるから、カルマ値は下がらない筈だし」

……何とも思わない。

副隊長の死はそれに何の影響も及ぼさなかつた。どころかそれは、副隊長の事を下等生物とまで呼んでいる。

今ここにニグンは理解した。この存在は天使などではない。魔神か、それ以上の存在。もし天使だつたとしても、やつは人間の守護を標榜するスレイン法國の敵。

それに呼ばれ、ニグンは警戒に足を止める。

「えー、ニグンさん？」

「ああ、私こそがニグンだ。貴殿の名前は？」

「名前は僕です。あ、一応ですけど、ぼくに精神支配されてたりする訳じやないですよね？」

僕。聞かない名だ。魔神は命名法も違うというのか。

僕の質問にどう答えた方がいいか、ニグンは計算する。恭順を演じ、僕の傘下に入れれば現在の命は守る事が出来るかもしない。が、嘘が露見した場合の事もあるし、それにこれ程の存在をスレイン法國に知らせない訳はいかない。

迷つた末に、ニグンは小さく「いや」と答えた。

「それは良かつた。僕はこの世界に来たばかりでして、始めた会つた人間が精神支配された奴ばかりじゃダメだなと思つていたんですね。だからニグンさん、僕はあなたと友好的に渡り合いたいと思つている」

直接ではないにしろ目の前で部下を殺しておいて何を言つている。「僕はまだこの世界の事がよく分かつていなんですよ。だから教えて欲しいと思うんだけど……いいですか？」

「断る」

ニグンはその提案を一蹴する。

この存在に情報を渡す事が下策であると判断した為だ。

目を見開き「貴殿とか言つてるから仲良くできると思つたんだけど」と呟く僕にニグンは鼻で笑う。

誰が魔神となど仲良くする物か、と。

ニグンはその行動に殺氣をあげる僕の下僕と化した自らの部下へと、声を張り上げた。

「お前達、冷静になれ、この存在は天使などではない、魔神だ！ 法国への忠誠を忘れたか！」

だが、部下達に反応はない。殺氣をさらに強めるだけだ。

ニグンは舌打ちする。やはり精神支配を受けている。部下の精神支配を治す為の手段をニグンは持っていたが、その手段は既に試し失敗していた。考えられる理由は一つ。術者の差が開いている為だ。確実に目の前のそれが自らよりはるかに強大である事が実感させられ、ニグンは汗を流す。

そして、これから展開を思考する。ニグンは敵対する意思を示してしまった。後戻りは出来ない。

「えーと、僕は死んだ人の言つた通り天使で、神じやないんだけど……正確に言うなら……あー、僕の種族は略さないと言いにくいで、熾天使<sup>セラフイム</sup>と呼んでくれても結構ですよ。で、えー、再交渉させてもらえないでしようか？」

「断る、監視<sup>プリンシパリティ</sup>の<sup>オブザベイション</sup>權天使！」

自らの生まれながらの異能によつて強化された、守りに特化した天使を召喚し、偲にけしかける。

視認する自軍の防衛能力を上昇させる特殊技術を考えればそれは愚策だったが、その程度の能力上昇など目の前の存在には意味がないと見ての行動だった。狙いは自らの懷にあるアイテムを利用する為の時間稼ぎ。

そう、魔封じの水晶による、最高位天使の召喚だ。

「困ったな、攻撃されると防ぐしかないじゃないか」と困ったように言つて、一度の蹴りだけで消失させられる權天使を横目に、ニグンはクリスタルに封印されていた第七階位魔法により、最高位天使を召喚した。

「いでよ、威光<sup>ドミニオン・オーバーリティ</sup>の主天使！」

召喚した天使の威光にニグンは安堵しかけたが、その安堵に自ら自身の思考が冷水をかける。

「ひやははは！ こんなので勝てるでも思つてんのか？ いい

「ひやははは！ こんなので勝てるでも思つてんのか？ いい

ね、最高！」

「止めろよ、ウル。多分この世界じゃ主天使は強い方なんだろう。  
……まあ、さつき熾天使って言つたのが聞こえなかつたのか、とは思  
うけど」

そう。

ニグンは熾天使という言葉を知らなかつた。だが、副隊長が言つた  
通りに、最高位天使というものが魔神にまで勝利したとも語られる  
主天使ドミニオンではなく、熾天使セラフィムなるものだという事は……。

——目の前の存在は魔神より上、神と呼ばれるべき存在だ。

ニグンがそのような相手に勝利する可能性はない。

いや、まだ分からぬじやないか——。

「ボーリースマイト〈善なる極撃〉を——」

だが、相手には一度だけでも攻撃を受けてくれるような慈悲はな  
かつた。

『神々の小剣』

布鎧の腰部分に差している、価値が一切計り知れない数多の剣の中  
から一本、白い、渦を巻いたような形状の短剣を取り出し、主天使へ  
と投げる。それが刺さる事で、聖なる光を伴つた衝撃によろめく主天  
使は、だが先程の権天使のように一撃で消失はしない。が、それは安  
堵するには早かつた。

「跪け」

偲の言葉に主天使は忠義の姿勢を見せる。

「ん、ある程度の聖属性ダメージを与えれば他人のシモベも掌握で  
きるのはユグドラシルのままなのか」

「なんで主天使にその特殊技術スペシャルが効いているんだ？ 30レベル程  
度じゃねえだろ、こいつ」

「ああ、善系種族にボーナスがあるんだよ〈信仰のオーラ〉。〈信仰の  
オーラII〉で天使が対象なら、55レベルでも効果があつた筈だ。逆  
に悪魔とかならマイナスなんだけど」

「ほーん」

手を翳し、短剣を自らの手元に帰還させながらの偲の発言を、ニグ

ンは聞き取る事が出来なかつた。いや、それも当然だろう。自らの切り札、いや、スレイン法國の切り札すら容易くねじ伏せる存在をしては。

「さて、主天使はこつちにつかせたし、次は何をするのかな、ニグンさん」

無垢な、モルモット実験体を観察している好奇心に満ちた研究者のような聲音に吐き氣を覚える。

これだけ力を見せつけられれば理解できた。僕は超高位の天使であり、魔神どころか神々に匹敵し、そしてスレイン法國の敵であるのだ。

自らの前にこれほど強大な敵が居る事に絶望する。  
部下を妬ましく思つた。精神支配をされさえすれば、こんな絶望もする事なく簡単に楽になれただろうから。

ニグンは振り返り、逃亡する。走つた先がどこへ行き着くのかも知らずに。逃げる事が不可能な事は知つておきながら。

「なんだ、もう何もないのかな。じゃあ威光ドミニオン・オーソリティの主天使と陽光聖典の人達、ニグンさんを捕まえてくれ」

それからニグンが捕まえられるまで、一分もからなかつた。

## ワールドサーチャーズ

飛空艇にある理科室の、その出口たる扉を閉め、偲は先程行つた作業の結果を考察する。

陽光聖典の副隊長だつた死体の検分は終わつた。どうやら副隊長の死亡は魔法によつて前もつて設定された物らしく、おそらくこれらの魔法を防ぐには高位階の信仰系魔法が必要だろう。

ユグドラシルと比べかなり平均レベルが低いらしいこの世界の住民では、九位階の魔法なんて使えないだろうし、十分な情報も得られずみすみす捕虜を殺してしまつに違ひない。それ程に巧妙な魔法的仕掛けがなされていたという事だ。

興味が尽きない。ユグドラシルと違い、魔法が厳密なシステムによつて縛られないこの世界では、どのような魔法技術が展開されいるのだろう？

聖典隊員にちよつとしたそれらの話は聞いている為に、なおさら好奇心が疼いた。

第0位階魔法に、武技に、生まれながらの異能……。

だが、そういつた楽しい事の前に、偲にはやる事があつた。

溜息をつく。

廊下を歩いた末に辿り着いた扉を偲は開ける。

操舵室に居るのはウルと、そしてパークーを着た女性だ。

日本人的な幼げな顔に貼り付けられているのは、夜の海を思わせる、黒と見紛う程まで濃い群青の髪と、波から浮き立つた泡を思わせる白い瞳。黄緑色のパークーから出る右手の先は青い粘液と化している。

そして、ティアマト副船長は笑顔をたたえていた。それが偲には恐ろしい。

ニグンを捕らえ、戦士隊を王国に戻した後。最初にあつたイベントが彼女の叱責だつた。

ティアマトに叱られた、というウルが言つた言葉の意味を偲は深く考えていなかつたが、その為にツケを支払う事になつたということ

だ。それらの叱責は偲の身を案じる物——曰く、未知の世界で不用意に動くな、曰く、我々の復活が可能かどうか確かめられてすらいなのに、死んでしまつたらどうするのか、など——であつた為に、反論も許されない。おそらく一種の拷問だろう。

NPCの忠誠は大体が過激だが、ティアマトは特にその傾向が強いように感じる。おそらく、設定の、『主君の為ならば諫言までする武士めいた性格』という記述から来たものだろうが……。

「偲様。聖典はいかが致しますか？」

「あ、ああ。えっと、後で僕が<sup>グレーダーステータスリカバ</sup>『上位状態回復』をかけておきますから、聖典に所属する隊長以外の人員には再度情報収集をして下さい。それが終わつたら、どれくらいの時間制限でシモベとして働いてくれるか調査をして、僕に報告を。一ヶ月シモベの状態が続くようであれば、効果は永続と見て船員としての運用をする手筈なので、それまでは船員になる訓練をさせておいてください」

「かしこまりました」

「あと、隊長だから知り得る情報はある程度得られたので、ニグンさんは逃がしていいですよ」

了承の意味をこめ、ティアマトが臣下の礼をとる。

偲は引きつりそうな顔を苦労して留めた。

この世界に来てから一週間程が経過していたが、やはり彼らの従属具合は反応に困る。

「ですが、偲様に報告をしろというのは、どういう事でしょうか？  
偲様自らが実験はなさらないと？」

ティアマトの言葉は、実験などシモベに任せずに自分でやれ、といつた要求を暗に示す物ではない。

このギルドの性格的に、実験とはギルドメンバー自らで行い、未知の発見を近くで楽しむ物だ。その為、ギルド長である偲が自ら実験をしないという事は、このギルドがどういう物か把握しているらしいNPCにとつて驚くべき事なようだった。

実際、偲もそうしたい所ではあるのだが、やむを得ない事情があつた。単純に偲は実験の際、その場にはいないのだ。

僕は少し躊躇いながらも、その事情を口にする。

「えっと、僕はしばらくこの船には居ません。王国に行きたいので空気が変わった。

ピリピリした空気にウルがびくりと反応したように見えたのは彼のキャラクター的に気のせいだろうが、少なくとも僕は現在、かなり緊張している。続くティアマトの叱責を警戒して。

そしてそれは来た。

「僕様！ 御身を大切にして下さいと何度も言つたつもりでござりますが、繰り返させるおつもりですか！ 聖典によりこの世界の情報は多数入手できましたが、それでも下界に危険がある可能性は排除出来ていません！ それに、もう少し情報を得てからで良いではありますんか。どうか御心変わりを！」

僕は口角を上げる。余りに震えたそれは苦笑いとは言いがたかつたが。

「ダメですかね？」

「ダメです。いくら主君たる僕様の意に背こうとも私は僕様の命を重視させていただきます」

鉄壁を思わせる口調には思わず背筋を正しそうになる。

だが、勇敢にも僕は抗弁を続けた。

「えー、ティアマトはつまり僕が攻撃を受ける事を危険視しているんですよね？ ジやあ、探索にはウルをつけます。これなら問題ないでしょ？」

オーディンにウルド、スクルド、ヴエルザンディの三姉妹や、ティアマト副船長とグライア兄妹を含めるギルド内の100レベルNPCはどれも外界での運用が困難だからこその人選だ。

ウルは元ボスなだけあって50レベルにしてはある程度の戦闘力——具体的に言えば100レベルに近づけるだけの能力を持つているから、この世界では充分護衛として機能するだろう。

その考えが不用心なのだと言わんばかりにティアマトは粘液の手をうねらせるが、そこでは譲歩してくれるようだつた。といつても、戦闘以外の面で食い下がつてはくるのだが。

「ですが、我々は外界の貨幣は持つて——」

「聖典隊員の所持金がある。それに、<sup>イエロークローズ</sup>黄衣も連れてくので、彼に商人として活動してもらえば稼げると思いますよ」

「ですが——」

「それに」

なお食い下がろうとするティアマトに対し偲は切り札を切る。

それは、聖典を捕らえ船に戻った時、ちょっとした言い訳のつもりが、ティアマトが叱責を渋々ながらも止めた事でNPCに対し有効らしいと発覚した台詞だ。

「ティアマト、我がギルド——ワールドサーチャーズの目的は未知を知る事だ。目の前に未知があるならば行かなくてはならない」

## 第二章：白銀の冒険者

### プロローグ

——夜闇の中、フードを被つた人影が迷宮都市の巨大墓地を進んでいた。

墓地内に設置されている魔法的な明かりがあつたとしても手元すらおぼつかない暗さの中、それに反してまばらに人々とすれ違う。すれ違う人々には時折、人影を押しとどめようとする者も居たが、すぐ思い直す。人影が墓地にいるのは、自らが考えている理由ではなく、単に墓参りに来ただけなのかもしれないのだから。

やがて人影は、靈廟にしては立派すぎる建造物を前に足を止める。すれ違う人々はこの建造物から出てきていたようだつた。

——この建造物こそが迷宮都市の巨大墓地が有するダンジョン、その入り口である。

「到着、と」

フードを外した人影——金髪の女はダンジョンへと入る。歩くたび、金属の擦れるような音が鳴った。

まるで、目的地が定まっているかのような足取りで、夜にしては明るい、迷宮の入り組んだ路地を歩む。途中、骸骨スケルトンなどのモンスターが襲ってきたが、女には難なく撃退ができた。

そして、目的の場所に到達すると、今度は壁に触れ、そして——幻術により隠された扉を開く。

扉の中には広い空洞があつた。死臭がそこらじゅうに漂う空間は、明らかに邪悪な何かを秘めている。

このダンジョンは盗賊やならず者の根城として丁度いい、適した場所だ。モンスターがうろつく為に衛兵は近寄らず、難易度もそこまで高くない為に新参者以外では冒険者すら入つてこない、女が所属する秘密結社には都合のいい場所。

女は広間を見渡すと、ある一点に目を止めた。

「そこで隠れて見てる人、お客様が来ましたよー」

気配を察知されたのに肩を震わせる弟子を下がらせる者が居た。

その人物のアンデッドにも似た風貌に、女——クレマンティーヌは笑いかける。

「ちわー、カジツちゃん」

「その挨拶はやめないか。誇りあるズーラーノーンの名が泣くわ」強大な力を持つ盟主を頭に抱き、そしてその盟主よりさらに強大な御方がその手に有する邪悪な秘密結社。その十二幹部は二人——カジットとクレマンティーヌが相対していた。

「で、おぬしはどういう理由でここに来た?」

「あー、それがねー」

カジットは少し驚く。

歯切れ悪そうに躊躇つて居る今姿はこの女には珍しかった。初めて見るのかもしれない。

「まあ、いいや。これだよ、これー」

「それは……」

カジットも一目見た事があつた。そのサークレットの名前は、叢書の額冠がっかん。スレイン法國の至宝が一つ。だが――

「ふん、漆黒聖典を裏切つて得たのがその程度のガラクタだと? 笑わせてくれる」

「ガラクタはひどいなー」

このアイテムは低確率でしか存在しない適合者でしか使用が出来ない。

だからこそ、スレイン法國の至宝をカジットはあざ笑つてみせる。「それより、おぬしにとつて重要なのはここからどう逃げるのか、ではないのか? おぬしの元同輩どもが追つてきてるだろうて」

「いんや、多分漆黒じやなくて風花の連中だとは思うけどねー。でさ、カジツちゃん、ちよつくらかくまつてくんない?」

カジットは顔を顰しかめる。クレマンティーヌをかくまえば、カジット

までもが被害をくらう可能性が高い。それに。

「風花聖典ならばすぐに見つかるぞ? 儂がかくまつた所で意味は

ないと思うが……。何か当てはあるのか？」

そうだ。だが、それと同時に彼女の当てを探るのは、目の前の女が決して脳味噌の無い人物ではないと知っているからこそ。

「なあに。でつかいイベントを起こしゃいいだけさー」

クレマンティーヌがサークレットを手元で転がす事で、カジットは彼女の意図を知る。

「これでカジッちゃんの儀式に協力すると言えばどう？」

「……なるほど。だが、見つけ出すというのか、百万に一人の適合者を？」

「そうだねー。そこは賭けになるのかな。といつても、ギリギリになれば切り捨ててくれて構わないよー」

「無論だ。おぬしからしても見つかるギリギリまでここで適合者を探すメリットはあるまい」

カジットからすればデメリットはあまり無い提案だ。最悪の場合風花儀式の場所を移すかもしれないが、それは本当に低い可能性だ。頃合いを見計らってクレマンティーヌを追い出せばよい。それに、万一一適合者が見つかれば――

「――死の祭典を前倒しで行えよう。分かった。儂も少し協力しよう。しかし、繰り返すようだが、おぬしに当てはあるのか？」

その問いにクレマンティーヌは答える。首を傾げながら。

「さあ？　どうしようね？」

## 都市1

『城塞都市』、または『迷宮都市』。

リ・エスティーズ王国はエ・ランテルを指す際、ある程度この都市を知っている人間はそれらの表現を使い分けるだろう。

王や貴族など、國家レベルでの視点で物を考える者であれば、そこは王国におけるバハルス帝国への要所として捉えられた。

そして、街の外れや巨大墓地などに様々なダンジョンを抱えるこの都市は、冒険者達の都としても広く知られている――。

\*\*\*

冒険者組合から出た傀は無数の視線を受け、恥ずかしいような、誇らしいような気分を得た。

目立つ行為が傀のような年齢には自尊心を回復させる物である事は常だが、恥ずかしさもまた感じているのは何故か。

傀は自らの布鎧をなぞる。

古今東西、布鎧が意味する物は防御能力を持つ服のような形式をとつた装備品だ。現実世界だと、自警団または警察組織における特殊機動隊や、父の勤務していた企業が有する私兵などの制服がそれに当たるだろうか。

だが、傀が着ているそれはそういった真面目な風体を見せず、まるで現実世界でどこかへ遊びに行く時に着ていたような、文字が書かれた普通の服のような見た目だ。

当然、ファンタジーと呼ぶべきこの世界では、現実世界によくあつた文字が書かれた服装など存在せず。

自らへの視線には珍奇な物を見たようなそれが必ず含まれているはずだと、傀は確信する。

(それに、ニグンさんや聖典の人達がこの装備を優れているとか言つてたし、この世界の住民全てに優れた武具を見抜く能力があるかも知れないんだよな……。やっぱり、世界級アイテムは持つてこない方が良かつたかな)

少なくとも、この文字のせいで目立つてるのは間違いないのだが

ら、外装は変えておく方が良かった氣がする。

(といつても、この世界でのクリエイトツールかなり使いづらいからなあ。やれる事は増えたんだけど、その代わりに、みたいな。試しに僕の異形形態をいじってたら三日もたつてたし)

「では、私はこれで」

共に冒険者組合を出た中年のような見た目をした存在に僕は手を振る。

イエロークローズ……イエローは元々触手だけで出来た悪魔なのだが、現在は人間形態である為に少し凜々しいだけの、太った中年男性としか見えない。

ちなみに、彼のトレードマークである黄衣……もとい黄色のレインコートは置いてある。

「じゃあ、僕の御用商人として頑張つて」

そういう設定だ。だが、決して内実を伴わない物ではない。

イエローは商人系統の職業がないワールドサーチャーズにおいて、エクスチエンジボックスやユグドラシル公式で提供されていた商人NPCに対する値切り<sup>特殊キル</sup>技術の為に重宝されたNPCだ。

彼にNPCとして設定された性格などもそれに準じた物になつており、ワールドサーチャーズが異世界に適応、そして異世界を探求するにあたつて最も有用なNPCが彼だと僕は断言出来た。

「かしこまりました」

そして、僕が貴族の子供として雇つている御用商人という、この都市で使うつもりの設定は、こういつた——今イエローがお辞儀をしているような——NPC特有の態度も覆い隠してくれる利点があつた。他のNPCでなくウルをここに連れてきたのにも、そういう理由がある。

イエローが去つていくのを見届けた後、僕は組合で勧められた宿へ、教えられたうろ覚えの道を思い出しながら向かう。

「冒険者の登録は上手くいけたな。つーか、この分だと大体の事は問題なさそう?」

敬意の全くこもらない声に、欠伸をしながらついてくるウルを見

る。

ウルは船長としての服をそのまま着て来ていた。腰より少し下まで垂れ下がった、彼の眼球より少し濃い緑のコートと、腰の部分が服により少し隠れた褐色のズボン。

だが、最も目立つのは火のような意匠が全体へと施された、通常より大きめなベルトだ。コートとズボンを同時に固定している藍色のベルトは、ウルが持つ、とある特殊技術<sup>ス</sup><sub>キ</sub>を強化する効果だけに特化した神器級<sup>ゴッズ</sup>アイテム『蒼火の弔い』<sup>ブルーセレモニー</sup>。飛空艇のNPCは大体が神器級アイテムを二個三個は持っているが、ウルが持つのはこの一つだけだ。

ウルは50レベル程でしかないとため、わざわざ最高位アイテムを持たせる必要がないとギルドメンバーには判断されていた。それなのに一つだけ持っているのは、ギルド長である偲が作った物を与えた結果である。

先程目立っていた理由にはこのアイテムもあるかも知れないなど考えながら、偲は口を開いた。

「そうだね、真言能力も問題なく機能しているようだし」

「頼むぜ、言葉は分かるけど、俺はこの世界の文字は読めないからな」

「頼まれた、よ」

天使の種族的な能力により、偲はこの世界の文字が読めた。というより、異世界人の言語が分かるのもそれによる物だと思っていたのだが、真言能力のないウルにもこの世界の言語は分かるらしい。

そもそも、飛空艇内のNPC達同士でも使える言語がそれぞれ違つたりする訳で、そこで気づくべきだつたのかもしれない。

例えるなら映画の吹き替えのような物が、この世界では行われているようだつた。

では、実際に彼らが話しているのは何語なのだろう。いや、もしかしたら声すら元々の物とは別の物が聞こえているのかも知れない。吹き替えだしな、と偲が適当な事を考えていると、ウルが話しかけてくる。

「だが、偲。ティアマトではないけど、その、大丈夫なのか？ 今は

能力の殆どが使えないんだろ?」

ウルが言つてゐるのは、現在僕の人間形態に設定されているペナルティの事だ。

ユグドラシルにおいて、そしてこの異世界においても、プレイヤーはクリエイトツールを用いて人間形態や半人形態などでのペナルティと異形形態でのボーナスが調整出来るのだが、僕は異世界で冒險者をするにあたり、現地に馴染む為にも、人間形態でのペナルティを大幅に大きくしたのだ。具体的には50レベル程度まで能力が下がる程に。

「確かにペナルティは大きくしたけど、それでも種族の特殊技術や利点をまるまる消しただけで、職業クラスの方は殆ど使える。それに、今の状態でもこの世界じや才能がある方だつて聖典の人達が言つていただろ。問題ないよ、多分」

「ふーん。ま、本人がそういうならいいけどよ」

「それに、そのペナルティの分、異形でのボーナスは恐ろしく高くなつたからね。今127レベルとかの強さなんじやないかな、僕の完全体。そんなどから、このペナルティはある意味武装でもあるのさ」「なる」

「分かつてもらえたようで嬉しい。さて、この辺だつたかな……」

僕は望遠室で書いた地図、その写しを布鎧のポケットから取りだす。

教えられた宿屋は、言われた通り看板に書かれた文字もしくは絵を見ればすぐに分かるのだろうが、折角地図を作つたのだから使つてみたい。

望遠室の書机によつて書かれる地図は単に地形だけでなく、そこでのフィールドエフェクトや地名が書かれており、紙面をなぞる事で拡大縮小も可能だ。そこらへんの機能はユグドラシルと同じらしい。唯一違う点は、ショートカットに設定する事で視界のすみにマップを配置する事ができなくなつた程度か。

ちなみに、望遠室のあの魔法地図机マッピングデーブルは神器級ゴッズアイテムだ。なにより、ユグドラシルの運営は未知を探す事をプレイヤーに求めていたた

めに、あの魔法地図机<sup>マッピングテーブル</sup>や全てを覗く万華鏡<sup>カレイドスコープ・フォーオール</sup>のような簡単に未知を既知に出来るアイテムは得てして、作る難易度が高く設定されていた。

そんな高位の魔法道具で書かれた地図によると、この城塞都市にして迷宮都市、エ・ランテルのフィールドエフェクトは、帝国と王国の国境帯に影響している『アンデッド発生確率上昇・高』と、王国全土の『悪魔の残滓』。そして、迷宮都市たる所以なのか『迷宮モンスター発生・中』もあつた。

これらを見た時、僕はかなり困惑した事を覚えている。一つ目はユグドラシルで見た事のあるものだつた事。そして二つ目と三つ目はユグドラシルで見た事がないものだつた事が理由だ。

そもそも――

(この世界でポップモンスターは存在するのかな？　この世界は魔法があるにつけても表面上では最もらしい法則が成り立つていて、うだから、何もないところから魔物が湧き出てくる事はないと思つてたけど。……いや、ないんだろうな。『モンスター発生確率上昇』じやなくて『モンスター発生』つて書いてあるし)

アンデッドが埋葬されなかつた死体などから発生するといった話は聖典から聞いているので疑問はない。勿論、戦争での死体が多数埋葬されているにしても、『アンデッド発生確率上昇・高』は発生しそぎな氣もあるが。

拡大と視点移動を繰り返し、僕はやつと目当ての宿屋を地図に見つける。

すぐ近くだ。僕は二段ほど階段を上がり、そして西部劇で見たような扉を押し開いた。

## 冒険者1

扉を開けた偲は盛大に顔をしかめた。

かなり暗い空間だ。パツシブ特殊技術<sup>スペシャル</sup>によつて強化された偲の視界では問題なく見れたが、外の明るさに慣れた普通の人間には、一瞬視界が真っ暗に見えるかもしれない。実際、隣に居るウルは自らの目に手をかざしていた。

ただ、問題なのは宿屋の質……のようなものだ。  
汚い。

偲が真っ先に感じたのはそれだ。その次に客の様子を見て「うわあ」と呟く。

酒場である一階には、ゴロツキ同然の人々が飲んだくれていた。それだけならまだいいが、彼らのほぼ全ての視線が自らへ向いている。ならず者達の値踏みするような目に偲は溜息をついた。

「宿だな、何泊だ」

目を向けると、声の主は露出した肌のほとんどに傷を持つ筋肉質な男だ。傭兵然とした姿格好だが、発言的に宿屋の主人らしい。

「一泊でお願いします」

その偲の発言に、宿屋の冒険者達は少し衝撃を受けたようだつた。いや、それも当然か。

設定された偲とウルの外装では、明らかにウルの方が年齢が高い。それなのに偲が代表して声を上げる事は、通常とは違う関係が偲とウルにあるという事を意味するのだから。

そういつた思考で行き着くのは偲が冒険者に夢想した貴族だという結論だが、そうであればゴロツキ同然の宿屋の主人に敬語では話さないだろう。

主人は少し目を見開くが、話を続ける。

「相部屋で一日五銅貨だ」

「じゃあ、それで」

「前払いだ」

手を差し出す店主へ向かおうとすると、耳元でウルの声が聞こえた。

(二人部屋じゃなくていいのか？　他のヤツが居れば密談に困ると思うんだが)

(ウルのこの特殊技術スペシャルがあるんだし、大丈夫じゃない？)

(うーん、どうだろ。日ごとの回数は限られるが、それでもいいんだな？)

ウルには元飛空艇ボスとして様々な特殊クラスがあり、それによる特殊技術として「機密司令シーフレットコマンド」が使えた。これは指揮官系特殊技術スペシャルではあるが、周りに気づかれず会話するという使い方も出来る事を偲は最近知つた。

そうやつて密談をしていると、偲達の進行を邪魔するように足が出された。

見ると、足を出したのは下卑た笑い方をする男。

周りの人間も、偲がどんな反応をするか気になつてゐる御様子らしい。

(こいういの、あんまり好きじゃないんだけどなあ)

偲は、その男の足をまたぐ。男は、拍子抜けしたような顔を一瞬浮かべるが、その油断がいけなかつた。

宿内に、骨が折れたような音が響き渡る。いや、実際に折れたのかもしれない。

(うわ、痛そう)

音の原因は、ウルが思い切り男の足を蹴つた事だ。ウルは50レベル程度でしかなく、素手で戦う修行僧モンクとしては20レベルもの物理攻撃力しかないのだが、男の防御力はそれより下だつたらしい。

足があらぬ方向に曲がつてゐるのを見れば、彼の骨折を確信できる。

「な、なにすんだよてめえ！」

男が驚いたような声音を上げるが、それには偲も同感だった。

「ああ？」宿屋ん中に通行に邪魔なモンがあつたから、後で来た奴の為に除かしてやつただけだぜ？　あ、もしかしてあんたの足だつた

? そりやあメンゴ!」

「て、てめえ……」

男は苦悶に呻くが、ウルの暴力的な笑顔には反撃する気が起きないようだつた。

流石に僕はこれ以上無視出来ない。これじゃただのいじめだ。

「あー、えっと、すみません。うちの仲間が」

そういうつてポーションを中空から取り出し、赤い液体を男の足へふりかける。

自らが治癒されていくのを感じ、男は安堵の溜息をつく。自ら喧嘩をふつかけたとはいえ、足が骨折する事は冒険者業に関わるものだつたらしい。

「——な、仲間がすまない事をした!」

男と同じテーブルに座っていた者達が一斉に立ち上がり慌てて頭を下げる。彼らの視線の先はウルだ。彼の好戦的な笑みに耐えきれなかつたらしい。

「おー。いいぜ、だけどこっちもポーション使つたんだ、その代金——」

「止める、ウル。……あー、大丈夫ですよ。こっちも仲間が粗相をしてすみませんね」

「……へめえ、ひたかんだじやねえは」

頸を打ち抜く事で強制的にウルの口を閉ざしながら僕が言う言葉に、男達は胸を撫で下ろした。ポーションは値が張る。男達には到底払える物ではない。

僕は問題は解決したと見て、宿屋の店主へ向かう。

「お待たせしました」

「ああ、確かに。あと、分かつてるとと思うが、宿屋内で問題起こすんじやねえぞ」

今それを言うのか、と僕は笑みを浮かべる。

「それは向こうの人らに言つてほしいですね」

肩を竦める店主に指定された三階の部屋へ、僕は階段を上がつていった。

\*\*\*

「……結構、いや、かなり強いな、あの赤髪。綺麗だし」

「あいつ、声からして多分男だと思うぞ？…………だが、子供の方は強さが分からなかつたな」

「そうかあ？　あんな高価そうな剣を10数本も差してるんだぜ？　疑う余地はないと思うが」

「高価な剣つてだけなら金持ちの息子もありえるだろ。ま、あのアツパーの見事さじやそんな事考えらんないけどな」

冒険者の新人にこういつたイベントはつきものだ。目的は新人の実力を試す事。その為、当然イベントの終わりには新人の評定に入る。今日宿屋に来た二人組への評価は『かなり強い』にまとまつていた。

「まあでも、赤髪が傭兵かそれ以外だとしても、子供が金持ちの息子なのは確定だろうな。ポーションを簡単に使つてたし」

「そういや、あのポーションってなんなんだ？　あんな色の見た事ないぞ」

話題はポーションについてのものへと移つていく。自然、冒険者達の視線は店主へと動いた。店主が引退した元冒険者だと知る者は多い。

その視線に店主は答える。

「俺も知らないな」

「おやつさんも？」

冒険者達には意外な話だつた。だが、店主の冒険者人生の中で、赤いポーションなどは見た事はない。

下を向き考え込んでいた店主は、酒場からの視線に込められた物が変わつた事に気づく。

「俺に調べろつて？」

「頼むよ、おやつさん。おやつさんなら薬師にコネもあるだろ？」

店主は苦笑しながら答える。

「分かつたよ。気が向いたらな」

\*\*\*

薄暗い部屋に入つた偲はアイテムボックスにいくつか自らの重い装備を入れていた。これから外に出て、都市を散策する為だ。

「ウルも行くか？」

「ん、俺は残るわ。ティアマトに定期的に連絡しろとか言われてたろ」

じゃあお願ひと偲がウルに言つてると、扉が開かれた。同じ部屋に泊まる人らしい。

偲が手を上げると、彼女も笑つて「やあ」と返す。

『戦士のような女』というより、完全に『女戦士』が板についた女性だ。

ウルの方をちらりと見ると、彼女は偲へと語りかける。

「聞いたよ？ 下での話。自己紹介でもしようか。私はブリタ」「偲と言います。こつちはウル。よろしく」

「ああ、よろしく」

偲と少し雑談をした後、ブリタは自らの寝台に座り込み、皮袋から中の物を取り出した。

他人の目の前でアイテムボックスを使うのも、と考え、宝箱に装備を入れる事にした偲はブリタが取り出したそれを見て、目を見開く。「ブリタさん、それって」

「お、偲にも分かる？　さつき酒場にいなかつたら。これを買ってきてたんだよ」

「ええ。……ポーション、ですよね？」

「その通り。このポーションを手に入れるのにどれだけの食事を節約した事か——」

そこから長時間ブリタの苦労話を聞く事になつた偲は、「ええ、最近初めてこの都市に来た物で、街の見物でもしに行きますね」という言葉とともに、部屋を出る。

(この世界のポーションって、紫色なのか)  
と、思いながら。

## ダンジョン

——庭小人の首が、また一つ宙へと飛ぶ。

「よ、つと！」

「お見事！　ノームを一太刀なんてねー。結構かつたいんだよ？」

「こいつら」

「そうなんですか？　ブリタさん」

僕は自らの剣を見る。

神器級アイテムながら、この剣は威力だけ見るなら聖遺物級にすら遠く及ばない物——その分、別の利点もある——だが、ノームにはひとたまりもないだろう。また一つ、首を刈り取った。

正直、迷宮都市が誇るダンジョンで湧くのが、庭小人の破壊工作者などですらない単なるノームという事は流石にないと思っていたのだが。

僕は、どう見ても人の作り出したようにしか見えない石レンガの壁と、その所々に設置された魔法的な光という、この地下第一階層ではどこにでも見られる光景を横目に見る。

「それにしてもその剣、すごい一品だね？　禍々しい、というか」「あはは……」

実際の事は言わない方がいいようだ。だが、僕はそれを言つた時の反応に興味を抱く。『これと同じ位価値の高い剣が、あと十本はありますよ』などと。

「おいおい、俺は褒めてくれねえのかよ。ブリタ」

「あんたは子供じゃないでしょ。それとも、子供扱いされたい？」

「もちろん、勘弁だ」

「あと、汚いから近づかないでくれる？　生臭い」

ウルは口をへの字に曲げる。ウルは冒険者としては修行僧——『飛空艇船長』などと名乗れる訳がない——という設定から、ノームを殺す際拳で頭蓋などを破壊していた為、脳漿や血液などがガツトレットを嵌めた両手どころか、身体中にまでぶちまけられた状態だった。

勿論、普通冒険者はそんな事にはならない。そもそも、冒険者は自らに見合った依頼を受ける為、そこまでの実力差を持った相手と戦わないのだ。それに、強い冒険者が雑魚敵と戦う際は、こういった事にならないよう手加減する物だという。だが、ウルに手加減が出来る筈もない。

「ブリタさん、こいつは耳を切るんですか？ 確か、ダンジョンでもモンスターの殺した証を持つていけば報酬貰えるんでしたよね」

僕は一応、新人冒険者への組合による講習を受けている。

「いや、やめた方がいいね。このダンジョンはモンスターを狩る奴が多い分、報酬は低いよ。そういうのは狩る必要範囲が広い街道か、人気のない墓地ダンジョンがいいだろう」

「なる」

「ダンジョンで割りがいいのは、装備品さ。こいつら無限に湧いて出てくるくせに、鉄装備とかしてくるからな」

僕はノームの死体を観察する。僕はデータクリスタルが出ない事に残念がつてはいたものの、この世界の住民からすれば、ここは確かに、無限に資源が出る場所なのだ。

この世界では柔らかい方の金属であるとしても、鉄が様々な用途で使われるるのは変わりないのだから。

「だから、ここのダンジョンでは装備品を取るのが常識だよ。軽いのはある？ 帰り道でモンスターに遭遇した時の為に、持つてくのは軽い装備だけにしようか」

「はーい」

素直っぽくそう言つて、ウルと共に装備を剥いでいると、彼が苦虫を潰したような表情をしていたのが見えた。

『なあ、これになんか意味でもあるのか？』

『ん？』

わざわざ一日ごとの枠を一つ使って、機密シーケレットコマンド司令で密談してくる。

『もーうんざりなんだけど。全然強くねえ、こいつら』

『早いなあ、まだ一日目だよ？』

まあ、設定した通りの行動なんだけどね、と僕は心の中で呟く。

『つーか、再度聞くがなんでこんな事してんだ？　冒険者をしてえつつーたって、お前がしたいのは冒険だろ？　別にこのダンジョンに気になるような事はないと思うぜ』

確かに、ウルの言う事はもつともだ。このダンジョンはユグドラシルでもありふれた——いや、出てくるモンスターが低級すぎて、逆に珍しい代物。だが……だからこそだ。

『ユグドラシルにいた僕ら的には確かにそうだろうけど、この世界にはダンジョンが珍しい物みたいなんだ。それもこの都市にしかない程に、ね。百年前の神とか邪悪王とか言われてる存在が作り出したとかだけど……』

『ああ、なる。つまり……プレイヤー関連だな？』

僕や飛空艇と同じく、この世界に転移してきたプレイヤーらしき存在またはユグドラシルのダンジョンらしき存在は、ある程度陽光聖典から聞いていて、NPC全員にも情報を共有している。

プレイヤーという概念を知らないのではないかと懸念していたのは杞憂だつた。特殊キルとかが分かる時点で今更だつたのかもしれない。

『だけど、そうですらない』

『と言うと？』

『ウル。僕はこのダンジョンを見た事がない。ワールドサーチャーズの知識に、こんな低級のダンジョンは存在しないんだよ。この意味、分かるか？』

『……なる』

ワールドサーチャーズはユグドラシルのギルドの中で最も多く世界の発見をしてきた。それを馬鹿にするNPCはあの飛空艇には居ないだろう。そしてその知識に無い物に興味を抱くのは当然の事だ。とはいっても、全く僕に敬意を持つてない感じのウルまでそうだとは思わなかつたが。

僕はウルの方を向く。密談が聞こえないブリタからすれば、ノームの装備を黙々と剥ぎ取つていた僕がする突然の行動は不可解だつたが、僕は気にならなかつた。

ウルというNPCは、意思を持つた今、どういうモチベーションでいるのだろう。彼は飛空艇の初見踏破ボーナスとして貰った、通称元ボスNPCだつた。だから彼の現在の状況は、自分以外の飛空艇船員を皆殺しにした張本人の一人に従つてゐる、という事になる。設定で縛られてはいたとしても、これは不可解な事ではないだろうか。

勿論、彼が裏切つて戦いを挑んできても、問題はない。ありとあらゆるバツドステータスやデバフを嫌う僕は、それらを全て最初に装備品で無効化した為に、襲う寝込みすら存在しない。

だが……好奇心は残る。

『どうした?』

『いや――』

『じゃあ引き続き説明してもらおうか。考えられるのはこの世界ではダンジョンを一から作り出せるのか、自然にダンジョンが出現するのか……。どちらにせよこの都市のダンジョンがお前の興味に足る物だつてのは分かつた。だが、それじやあ魔法を使えばどうだ? グライアの片っぽ程じゃないにしろ、僕も情報系魔法使えるんだろ?』  
『探知できなかつた』

『…………はあ!?

『多分、逆探知もされたね』

それは一応防いだけど、と額を揉みながら僕は言うが、ウルは驚いて口を手で塞いでいた。声が漏れないようにとっていう考え方からの行動だろう。

『まあ、探知が防がれたつてのはダンジョンの深部だけの話だけどね』

『つまり……地下深くに強者が居るつて? この世界では一般的じゃない程に?』

『それだけじゃないよ? 味方への攻撃が効くこの世界で情報系魔法を防ぐという事は、味方からの探知も防ぐという事』

『それが?』

『例えば僕とウルからの定時連絡がなくなつた時に、もし完全な情報封鎖を行つていれば、飛空艇の面々は僕らに何が起こつたのか探知

魔法で調べる事も出来ないだろ』

『あー、どういう事だ?』

『えっと、あんまり自信が無いけど、だから自らの情報を隠す事はつまり、大方の情報が味方にとっては自明なのか、その人物にとつて敵からの探知を防ぐ事の方が自分の状況を味方に知らせる事よりも重要なんだと考えられる。後者の場合、かなり興味深いね』

『なる、確かにそれは俺も気になるわ。にしても、最近この世界に来たばつかとは思えない適応ぶりな』

ウチのギルドが持つ情報戦技術をナメないで欲しいね、と僕は言って、以前に攻性防壁を発動した時の事をふと思い出す。あの時は味方への攻撃の件を思い出して、攻性防壁に設定する魔法を探知魔法だけにしたものだが――。

あの探知は聖典から情報を収集した上で飛空艇幹部と協議したところ、法国による陽光聖典への監視だと結論付けられた。その場合、僕と飛空艇に仕掛けられた攻性防壁が法国へ発動した訳だが、議論においてこれがかなり危険視されていた。

僕の攻性防壁に設定されていた魔法も飛空艇のそれと同じく〈クリエイト・ネスト蠅の王〉なのだが、これがかなりまずい。情報戦を扱う事が多かつたギルド、ワールド・サーチャーズにおいてこの魔法が攻性防壁として好まれたのは、生み出される蠅の王ベルゼビュートが倒されない限り帰還しない為だ。

蠅の王がレベルに対し弱いモンスターなのは、このメリットの代償なのだろう。ギルドでは、生み出した蠅の王に探知魔法をかけることで探知者の情報を探る手をよく使つたものだ。

ただ、この倒されない限り帰還しない性質が蠅の王を倒す事の出来ない程に平均レベルの低いこの世界に限つては大問題だ。おそらくは四体の蠅の王が法国に出現し、国が滅びるんじやないか……と最初、思っていた。

だが――。

(法国にモンスターが出現したという話すらなさそうだった。探知ではそれらしい影は見えなかつたけど……レベル93を倒す強者が

法国に居るのは間違いない)

偲は自らの思考に結論をつけ、〈機密司令〉での会話に戻る。

『あと、経験値を稼ぎたいのもあるね。願いが叶わなかつた分幸い  
レベルは減らなかつたけど、余剰経験値はある〈星に願いを〉で  
ほぼ全部取られたと思うし』

『ああ、あれね。といつても、こんな弱い奴らで経験値稼げるのか  
?』

『僕の職業でのパッシブ特殊技術があるから、装備も相まつて経験  
値は三百倍にまで引き上げられる。最低の一点でも三百点になるか  
ら、そんなに馬鹿にしたものじゃないよ』

経験値の高いレアモンスターを一定数狩る事で取得が可能な  
幸運な戦士(ラッキーウォーリア)に始まる職業シリーズでは、取得経験値が高くなる特殊技  
術が得られた。全面戦争によつてクラス構成を変えた時、レベリング  
を楽にする為真っ先にとつた職業もある。

『ふーん。あ、そういうや、〈星に願いを〉で叶えられなかつた願いつ  
てなんだつたんだ? その世界級(ワールド)アイテムで強化されてんだから、大  
抵の願いは叶えられるだろうに』

布鎧にウルが指をさしてくるのに、偲は寂しげに苦笑する。

〈星に願いを〉が望んだ願いを叶える魔法となつた事に、偲はそこま  
での驚きを感じなかつた。ユグドラシルでも、運営にシステム変更を  
要求出来るという効果が、ランダム選択肢として表示される中にあつ  
たために。勿論それは信じられない程の低確率で、だつたが。

幸運値が高く、世界級アイテムによつて強化されていた為に見つけ  
る事の出来た効果だが、この世界では常に使えるらしい。少し損をし  
た気分になるが、こちらの世界での〈星に願いを〉は使用経験値量が  
それらの分軽減されるようになつたようなので、実際にはそこまでの  
損失は無い。

だが、強化された〈星に願いを〉ですら叶えられない願いも存在す  
ると知つたのは、数日前の話だ。

『……まあ、それは言わないのでおこうかな』

『ふーん? ま、理解したわ。じゃあ、ダンジョンは今日の内に踏破

するか?』

『ブリタさんが居るし、それは後に取つておこうか。今日は第一階層だけにしよう』

『おつけ』

長かつた機密司令を終え、僕はふと気づく。時間をかけすぎたのではないかと。急いでブリタの元へ向かう。

『ブリタさん、終わりました』

「お疲れ。随分時間をかけたけど……。まあ、最初だしこんな物か。まだ続けられそう?」

「はい、大丈夫そうです」

「じゃ、狩り続行と。これじやあすぐ鉄級冒険者になれそうだね」

「そうですか? ありがとうございます!」

疑われるのにひやひやしながらも、僕は少年の素直さを演じる。ブリタは、相部屋した縁か、ダンジョンへ行くと話すと、ここへの馬車の調達や冒険者の基本事項の確認など様々な事をしてくれた。そんな立派な装備を持っているなら墓地のダンジョンよりもこっちの方がいいだろう、という配慮付きだ。

子供の外装が功を奏したのだろうか、と僕は考える。その場合、完全異形形態を見たら彼女はどんな反応を返すだろう。

「どうした?」

「いえ」

# 王国1

「……あの夢か」  
服の袖で顔を拭う。

二日前に、かなり激しく雨が降った。

そのせいであの日の事を思い出してしまったのだろう。

「光れ」

マジックアイテムを起動した事で、暗く窓のない部屋に明かりが付く。

いつもと同じように、兵士としての事務手続きなどをする為に用意された机の上、いくつかある本の中からある一冊を引き抜く。  
開いたそれは、紙がよれ、微妙に変色していることから持ち主に何度となく読まれた事が分かる物だ。すでに記憶されている筈が、それでも読む。

その本はとある原本の写しとされる物だ。

百年前に建てられ、そして滅んだ国。そこでは、新興国ながら様々な軍拡が行われていたと聞く。勿論、軍拡では兵士が効率良く強くなる事が出来る方法の研究も進められていた。

研究の成果は国が滅んだ後、広く諸国に広まり、こうして自らの手元に収まっているのだ。

百年前の国からのこういった影響は数知れず、特に戦士に関しては、平均的な強さがそれ以前よりも高くなっているらしい。

そう、戦士は、人は強くなつた。

——ただし、それも才能のある者に限つた話だ。

だからこそ、自身が焦燥の籠もつた目で、この本を見る事になるのだ。

才能の籠もつた人が、羨ましい、——妬ましい。

頭を振つて暗い考えを追い払い、彼は鎧を着、訓練所へと向かつた。

\* \* \*

念入りにストレッチをした後、重く作られた大剣で素振りを三百、

## 四百、五百——。

六百まで到達すると、腕の筋肉が悲鳴を上げ、手は痺れている。明らかな限界を感じるが、焦燥が腕を止めてくれない。

ある時から、肉体が成長を止めた。それ以前からも戦士としての成長は剣を握り出した頃に対して牛歩以下の進みだつたが、それすら、今はもうない。

彼の強さは限界を迎えたのだ。

それに気づいた時、どれだけ胸を搔きむしめたか。自らの才能の無さなど、とつくるのとうに理解していた。だが、それでも受け入れられない物はある。

自らの主人がどれだけ慰めてくれようと決して埋められれない欠けが、焦燥が、一年以上彼の心を蝕んでいた。

だからこそ、彼は大剣を振るおうとする。だが――。

「そこまでにしたらどうだ？ クライム」

「……ストロノーフ様」

慌てて声のした方を振り返つてみれば、いわお厳のような顔をした男性の姿が見えた。

「それ以上はやり過ぎだな」

「そう、ですね。無理をしそすぎました」

クライムは戦士長の顔を見る。

死亡し、復活を果たしたという話はクライムも聞いている。だが、それも思わせない立ち居振る舞いは、クライムの憧れる戦士そのままだ。

戦士長が死亡する程までの出来事は大いに騒がれた。知人の居ないクライムが知る程だ、王都内では知らぬ者は居ないだろう。騒がれた理由は、戦士長死亡というそれだけではないのだが。

「クライム、そうだな、一つ剣を交えてみないか」

クライムは目を丸くするのを抑え切れなかつた。

二人が訓練所で会う事はそれなりにあつたが、剣を合わせる事は無かつた。

それは二人の立場が許さない為である。

現在、王国は三つの派閥に割れている。

これらの派閥の力は互いに均衡を保つており、だからこそ現在は内戦でも起こりかねない程の危機的状況だ。

ガゼフは平民ながら王の懐刀とされていることで、同派閥であるはずの王派閥の貴族にすら嫌われている。それが無くとも、王派閥と敵対している貴族派閥にとつては攻撃の的なのだ。

対してクラームの主は、神殿派閥に属している「黄金」——神殿派閥に言わせれば「黄金の聖女」——ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。

百年前の悪魔的事件から力を付けた比較的新興勢力たるこの派閥は、王・貴族派閥の両方へ利権を流しており、だからこそ両派閥に対しある程度圧力をかける事が出来る。均衡を保つているとは言えど、現在少しでも優位であるのは神殿派閥だ。

ガゼフとクラームが共に訓練をすれば確実にクラームが負けるだろうが、それを覗き見されていた場合起きるのは、王族に仕えている平民として大いに疎まれている、クラームへの攻撃だ。

それに対し神殿派閥が黙つているはずはなく、何らかの方法で反撃を行うのは間違いない。権力抗争は加速していくだろう。そうなれば互いの主人にも累が及ぶ。

それを恐れ、二人が訓練する事は今まで無かつた。

「一度死んだものでな。ちと手強い相手でリハビリをしたい」

クラームは噂が本当であつた事に驚愕する。

「復活……ですか」

「ああ。いと尊きお方のおかげだ。彼が居なければ俺は……死んでいただろ、というのもおかしいか。実際、死んでいたんだからな」  
ブラックすぎるジョークにクラームは苦笑いをし、死亡までした任務での事を問い合わせるのは気が引けるのだが、それでも好奇心により口を開いた。

「その御方の名前は？ 私も神殿派閥に属する者。聖書に書かれた神などであれば名前で分かるかも知れません」

「名前は……、ああ、聞いていなかつたな。だが、俺ごときではかの

お方のお名前を知る事さえ不敬だったのやもしれん」

「ストロノーフ様、ごとき、などとおつしやらないで下さい。貴方は

王国の懷刀なのです」

あの噂は本当だったのかと、クライムは微妙な表情を我知らず作つてします。

ガゼフの復活に関して騒がれた理由はもう一つある。それは、ガゼフが神的な存在を見たと証言している事——話では、ガゼフを復活させたのがその存在らしい——そして、ガゼフがその存在を信仰するような素振りを見せて いる事だ。

当然、神殿派閥は揺れた。ガゼフの事を既に預言者のごとく扱っている者もいれば、悪魔に魅入られた可能性もあるのではないか——それだけ、百年前の悪魔の残滓は今も王国に色濃く残っている——慎重に事を運ぶ者も居るというのは、クライムの主による言だ。

結局、現在まで大きな動きはないが、もしかするとこれから王国最強たるガゼフ・ストロノーフが神殿派閥に参入するとも限らない。そうなれば神殿派閥の力が強くなり、王国を席巻する可能性もあつた。その場合は、自らの主が国を統治する事になるだろうから、クライムに損はない。だが、自らの尊敬する人物の変貌は何かこう、心に来るものがあつた。

「では、やろうか」

「はい、お願ひします！」

会話による緩んだ空気は消え、訓練所には戦士の気配とでも言うべき物が充満し始めた。

ガゼフとクライムは剣を抜き、構え、互いを睨めつける。

ガゼフは動かない。先手を譲られたようだ。

相手へと走り、クライムは早速、武技を発動する。

（即応体勢）

即応反射を元にしたクライムのオリジナル武技だ。クライムの技量では即応反射は使えない為、簡易版だけでもと見様見真似でこれを編み出した。

即応反射のように無理な体勢を正常なそれへと戻す効果はないが、

通常の姿勢から完璧な——剣を振る為の姿勢へと身体を整える事は出来る。

そこから放たれるのは、クライムの異常に発達した大上段の振り下ろし——

——剣と剣のかち合う音が響いた。

ガゼフが、クライムにとつて自慢の振り下ろしを防いだのだ。

自らの才能の無さに、相手の才能への羨みに、歯噛みしそうになる。

ガゼフ・ストロノーフにしてみれば、自らの攻撃を受け止めるなど簡単だつたに違いない。

だが、それは想像出来た事。

「さんれん三連」

クライムの剣が引き戻される。その動きは、先程の振り下ろしに力が全て込められていた事実を考慮すると少し異常だ。

ふつう、全力の攻撃が受け止められた際、勢いに引っ張られ、引き戻すのに隙を作る。

それに対し、その引き戻しはあまりにも滑らかすぎた。その理由は、やはり武技だ。

即応反射の動きを腕だけに限定してクライムでも行使出来るようにし、剣を引き戻す。〈即応反射〉による引き戻しと〈連撃〉によるスマーズな動きの切り替えを掛け合わせた通常ありえない全力での三連撃。勿論、腕に負担はかかるが、王国の戦士長相手にそんな事は考えていいられないだろう。

誰にも防げない三連撃を作れという、クライムが尊敬する冒険者からの言葉を胸に編み出した武技。その二撃目、突きをガゼフに繰り出します。

\* \* \*

ザツクはとある傭兵団の雑用係だ。いや、あの団体を傭兵団とするには無理がある。稼ぎが無い時には野盗にまで成り下がるような集団には、傭兵団という呼称すら高尚にすぎるだろう。

そんな集団の小間使いとしてあくせく働いているザツクは、貧民街のアジトへとある仕事を持ち帰る所だった。

仕事が上手く言つたのだ、足が自然速くなるのも仕方ない話だろう。だから——、角で誰かとぶつかりかける。

「あつぶないなー」

「……そりや、こっちのセリフだ！」

身を翻し<sup>ひるがえ</sup>、ザックの細い身体を避けた女のぼやき声。ザックは自らの気分に水をさされた不快感に怒鳴り散らす。

「前向いて歩きやが……あん？」

怒りに任せ言葉を続けようとしていたザックは、女がこちらを見た際の、異様な雰囲気の変化に戸惑う。

何より、その笑顔に警戒心が向いた。

喧嘩を売る相手を間違えたか。そういえば、身を翻した時、女が纏うマントの下から鎧のような音がした気がする。もしかすると冒険者か。

「今、ちょっと立て込んでてねー。観者の額冠に適合する人を探してるの。それにはだーいぶ広い調査が必要でねー。それも、風花に見つからないようにしながら！　だから、居なくなつても困らない人捕まえて調査させてるんだよねー」

ザックは自らの身なりを見る。自らが行つていた仕事の為にある程度整つてはいるが、明らかに暴力に身を置く者の気配が漂う容姿だ。これを見て自らが『居なくなつても困らない』と女が考えただろう事は間違いない。

そして、そんな情報をザックに丸々教えているのはなぜか。予想に、ザックの血の気が引く。

——喋る口が、すぐに無くなるから、という予想に。

女が近づいてくる。金属製の何かを抜くような音と共に。

「や、やだ、やめてくれ」

「ん、だーめ」

必死の懇願も一蹴され、ザックはせめてもの可能性に賭けて、走る。

だが、並走するような声に絶望を覚えた。

「チャームパーソン人間種魅了」

意識が混濁し、作り変えられていく感覚。

己の意思が消えていく不快感。

耐える事などザックには出来ず、ただ、誰かの名前を最後に叫んだ。

＊＊＊

鼻歌があつた。

聞く者が聞けば、眉を潜めたであろう鼻歌。

知識のある人間は、揃つてその行使者を止めようとするだろう。

邪悪な調べだ。

鼻歌に歓喜するかのごとく負のエネルギーが集まつたそこに、また一つアンデッドが姿を表す。

「お前はそこで待機しておれ」

去つていく死者のエルダーリッチ<sup>エルダーリッヂチ</sup>に、カジットは満足げな笑みを浮かべる。

計画は順調に進んでいた。一ヶ月ほど力に集中する必要があつたとはい、カジット程度の力でさえエルダーリッチを召喚できる程に負のエネルギーは集つてゐる。エルダーリッチを容易く召喚する存在もカジットの知る中に居るには居るが、ズーラーノーンが盟主のさらに上に立つ偉大なる御方、AINZ・ウール・ゴウンなる存在をカジットなどと比べるのが間違ひだ。

あと一年もせずに、カジットの望む儀式は結実するだろう。

「あの女が成功すればそれも前倒しで行えるだろうが……。まあ無理な話か」

カジットはまた邪悪な鼻歌を垂れ流し続ける。

## 王国2

「では、バルドさん。その件よろしくお願ひします」

「はい。夜も更けちゃつたし、気をつけて。イエローサン」

黄  
イエロー  
衣は商人として用意した拠点に帰還する途中、また一つ、主君

に自らの働きで奉仕出来た事に破顔する。

今商談を進めていたバルドという相手は、城塞都市としてのエ・ランテルにおいて重要な、食料取引の大部分を掌握している商人だ。

つまりところ都市の中でもかなりの権力者だが、この都市に来て十数日しか経過していないのにそのような商人と取引が出来ているのは、イエローが優れた商人として創造された為だ。

イエローはギルド、ワールドサーチャーズの中で行われた『精神系作用のある魔法や特殊技術』は、値引き系の特殊技術にどれだけ影響するか』という実験の完成品である。

彼がレベル50程度なのは最も商人系特殊技術に効果のあるビルドがそれだけで成り立つと実験の中で理解された為であり、彼が悪魔という種族なのも種族的な特殊技術として、『支配の呪言』があるからこそだ。だが、そういうふた特殊技術は異世界人に違和感を持たせない為に傀に禁止されている。

イエローの有用性はこの場合、特殊技術による物ではない。それは創造主カバー・シーオーバーに決められた、彼の性質。傀に言わせてみれば、設定だ。

有り体に言えば、設定において彼は他人に取り入る才を持つているのだ。特殊技術を用いざとも、素の交渉術が巧みである事。それは言葉や舌戦などが重視される場――つまりは人間の社会において、あまりにも優位に働く。

彼が自らに幻術をかけて作つた中年の顔も、彼の才覚を表していだ。

決して整つてゐる訳ではないが、他人に警戒を与へず、威圧をかけた。

ないその顔が、他人との交渉にどんな影響を与えるかは言うまでもないだろう。

僕が、外に出せる者の少ない飛空艇から彼を連れてきたのは、当然と言つていい。

「予定より少し早いですが、明日は冒険者組合に行きましょうか」

その才覚もあるが、飛空艇の支援によつてイエローは短期間でかなりの財を作る事が出来た。これであれば、冒険者組合に『依頼』を出す事も出来る。

イエローが商人としてこの街で扱つた物には勿論普通の品や、僕が冒険者として入手した武具などもあるが、最初に様々なコネを作る為に売つたのはかなり特殊な品々だ。それは、飛空艇が『略奪』した亜人達のアイテム。

この世界での略奪がどのような物になつたかを確かめる為に、飛空艇は情報が広がりにくい——飛空艇の略奪を探知されないような一場所で実験を行つている。その実験で入手できた品々はイエロー達からしてみればゴミも同然だつたが、この世界の住民、特に王国の民からすれば珍しい物だつたようで、よく売れれた。

勿論、亜人のアイテムを多数持つてゐる事に対する疑惑の目も無くは無かつたが、イエローと共に冒険者登録を行つた人物、つまりはイエローの主がダンジョンにおいて冒険者としての実力を明らかにした事で、それらも無くなつてきた。

イエローは主の噂に笑みを浮かべる。異例の速度で銅級から銀級冒険者まで駆け上がつた冒険者に関する話は、彼のような商人筋でさえ広まつてゐる。

だからこそ、イエローは命じられた任務に動きやすくなるのだ。任務の一つは僕の御用商人として。そしてもう一つ——

イエローが歩くのは、エ・ランテル内、高級住宅の立ちならぶとする区画。向かつてゐるのはその奥だ。

目当ての、二つの出入り口がある建物を見つける。地上と地下の二つの扉があるその建物に、イエローは迷わず、階段を降り、地下の扉を開けた。

\*\*\*

とある宿屋の主人が、薬師の店に来ていた。

冒險者御用達の宿屋では、ポーションなど依頼に必要な物を冒險者達に用意するサービスが存在する。そういうつた類たぐいの宿屋を経営しているその人物は、サービスの為、薬師からポーションを購入しに來いた。

その薬師の家族とある程度知り合いであるその男はいくらか世間話をして、そういえばとその薬師に話そうと思っていた事を思い出す。

少し前に別の宿に鞍替えした、とある冒險者の客の事だ。

その話を聞き、薬師は興味深そうに——見方によれば、興奮しているようにも聞こえる声音で——こう言うのだ。

「へえ……。赤いボーションですか。その冒險者さんがなんて名前の人なのか、教えていただけませんか?」

宿屋の主人は、現在の取引をいくらか割引する事を対価に、その申し出を受ける事となる。

## 依頼

昨日イエローから『伝令』<sup>(メッセージ)</sup>が届いた為、僕は早朝ではなく昼に冒険者組合へ行つた。ウルは宿屋に残してある。

いつも早朝へ行つていたのは無くなる前に依頼を受ける為だ。この半月で僕は銀級冒険者にまでなつたが、銀級程度の依頼をこなせる冒険者はエ・ランテルでも多い。

そして今日、昼に来たのは——と、僕は冒険者組合の扉を開け、目當ての人物達がテーブルで談笑しているのを見つける。一人は勿論イエローだ。後の四人は僕と同じ銀のプレートを首から下げている。  
「お待たせしましたか？」

「あ、いえいえ。同じ階級の冒険者とはいえ、今は依頼主と依頼された冒険者の関係です。だから気にされないで良いですよ」

「そうですか？　でも、敬語は止めていただきたいですね……。年上からそう言われるのはちょっと

「ははは、ちょっとわかるわ。ペテル、だつてよ」「ルクルット……。まあ、分かつたよ、えつと……」

『漆黒の剣』の方々、彼が私の主人である僕様です

イエローが助け船を出すと、四人の視線が少し性質を変えたように思えた。

「へえ。お前があの……。じゃああの『鮮血』または『悪魔の咲笑』はどうしたんだ？」

僕とイエローは顔を見合させる。誰の事かは想像できる。だが——

（僕の知らない所であいつは何をしているんだ？　しかもリーダーの僕より先に二つ名が出来てるし）

「えっと、あいつは置いてきました。というのも——」

『漆黒の剣』の方々。先程も少しお伝えしましたが、今回は僕様に平民として冒険者として、そしてこの都市に生きる者として様々な知識を教えて貰いたいのです」

僕がこの時間に組合に来たのは、これの為だ。簡単に言えば情報収

集の一環だった。

四人は納得を込めてうなづく。

「なるほどなあ。この都市の人間にしては噂を聞くようになつたのが急だなと思つてたら、別の都市——いや、他国の貴族だったのか」「ご理解いただけたようで嬉しくございます」

「平民として、という事は貴族を出奔したなどであるかな!」

「待て、ダイン。僕も、まずは自己紹介からにしないか?」

「なるほど。分かりました。といつても、僕はイエローが言つた以外の事は無いですよ? イエロー・ヤルクルツトさんが言つていたそ

の『鮮血』ウルとチームを組み、リーダーをやつてる僕です」

「イエローさんもチームに入つてるのか?」

不思議そうに言つたのはルクルツトだ。

他の人もだが、イエローに対してかなり親しい様子を見せている。設定は十分に機能しているようだと、僕は心のメモに記入をして置く。

イエローを連れてきたのは勿論商人としての役割に期待したのもあるが、設定がどれだけの効果をなしているかという実験も兼ねていた。

飛空艇では異世界に来てから様々な実験を行つているが、こういつたNPC達が知りえない情報などはNPCに任せるのでなく僕が秘密裏に実験を行う必要があつた。勿論、設定うんぬんをNPC達に教えてもいいのだが、彼らはそれらを適当な遊びではなく創造者が何か意味があつてそうしたのだと理解しているのだ。わざわざ夢を壊す必要はない。

「えっと、イエローがチームに居る事、ですね。講習で、ダンジョンから取れたアイテムを商人に売るのは、必ず手数料のある組合を通さなきやいけないって言われたので」

「んん? あー、チーム内で渡す分にはオッケーだから、イエローさんに渡して、イエローさんが商店で売る、つて事? 手数料が取られないように」

「ああ、商店で買い物をする人が商人かどうかなんて、組合が確かめ

る事もしないでしようしね。大分グレーですけど」

「なんというか、冒険者初っ端から酷い裏道を通る物であるな！」

「そうだろうか、と僕は思う。

裏道を探るのはワールドサーチャーズの基本だ。彼らに127レベル計画の概要を見せてやりたい。

「僕が考えたのか？」

「ええ」

「へえ。そりや幼いのに賢い事で」

「そんな事ないと思ひますよ？ 同じ事考える人は居るでしょうし」

「確かに同じような事をするチームも聞いた事はありますがあ……」「まま、自己紹介を続けようぜ。俺は野伏のルクルツト・ボルブ。チームの目と耳！」

ルクルツトの言葉にチームは口々に自己紹介を始める。

「うむ。ダイン・ウッドワンダー、森祭司ドルイドである！」

「魔法詠唱者マジックキヤスターのニニヤです」

「あれ、ニニヤ、『術師』スペルキヤスターは？」

うわ、とペテルの言葉にニニヤが恥ずかしげな風に顔を引きつらせる。

僕にはその二つ名がどういう事か気になるが、なんというか聞かない方が良さそうな雰囲気だな、それを恥ずかしがるなら魔法詠唱者マジックキヤスターとかも恥ずかしがれよなどと思つていると、ルクルツトが教えてくれる。

「僕君、こいつ生まれながらの異能持ちなんだよ」

「ああ、成程。有名なんですか？」

「ああ。この都市ではな」

君付けされた事に怖気が走るが、彼に悪気はなさうなので何も言わない。

「効果は魔法適性らしいぜ。とは言つても、そうやつて限定するのも良くないんだがな」

「へえ、そりやなぜです？」

「変化がなくなるからさ。タレントはイメージトレーニングとかの訓練で強化するものだからな」

「へえー」

「僕君は知らなかつた？ まあ、これを解明したのは百年前にここの辺にあつた国だから、そこまで広まってないのかねえ」

「百年前の国、ですか」

『百年前の国』とは、今見つかっているユグドラシルのプレイヤーが関与してそうな物の一つだ。

その国は丁度今のカツツエ平野辺り、王国と帝国の国境にあつたらしい。斬新な政策を幾度も打ち立て、軍事力と生産力が十分にあつた為に現代における多様な文化の源泉だとも言われている。何らかの理由で滅びたらしいが……。

軍拡もしていたらしいからタレントの訓練方法も発見できたのだと考える事もできる。が、ユグドラシルのプレイヤーというユグドラシルの法則に準じており、逆にこの世界の法則からは外れた異物が、そんな研究をしつかりと出来るんだろうか。

だが、僕は次の人物の自己紹介にその思考を止める。

「で、僕がこのチームのリーダー、ペテル・モーグ。見ての通り戦士だね」

「よろしくお願ひします」

「こちらも改めて、よろしく。僕の噂はよく聞いてるよ」

「そりや、嬉しいですね」

「で、依頼だけど。まあ言つちやえれば知識だろ。知識ならニニヤに任せてもいいかな……。ニニヤはチームの頭脳なんだ」

「あ、でも森祭司ドルイドとか言つてましたね、そういうつた知識も欲しいです」

「ああ、成程。そういうのもありだつたら、全員で教えるのが良さそうだな」

リーダーのペテルが次々と物を決めているが、それに反対するような声は上がらない。僕の見る限りでは良いチームのようだった。

\* \* \*

もの知らずでも怪しまれない、自らが考え出した設定に偲は感謝する。この世界において偲が余りにも無知である事を知つたからだ。

「なる……」

「どうかしました?」

「いえ、ニニヤさん、大丈夫です。赤色のポーションって、無いんですね……」

「ええ。紫色と青色の物だけですね」

「時々赤紫色の物が広まるが、そのぐらいであるな!」

なんという罠だと、偲は頭を抱えそうになる。宿屋で男の人に使つたポーションをタダにしたのは間違つていたかもしぬれない。希少価値が高いだろうから、ウルの言う通りお代を貰うべきだつたか。

というか、存在しないのであれば偲の質問 자체、変だ。違和感を持たれなければいいのだが。

ふと、偲は思いつく。この世界では赤色のポーションを持つだろうユグドラシルプレイヤーが、なぜか過去にも来ている。

ならば、こうだ。

「本には、あつたんですけど……」

「ああ、神話でありますね、赤色のポーション」

「へえ。そりや野伏として興味があるぜ。どんなんだ?」

「僕もうろ覚えですけど……（プリザベイション）保存をかけずとも腐らないとか、肉片からでも全身が蘇るとか。薬師には神の血とも呼ばれてるとか」

多分肉片からでもは誇張じゃないかな、と偲は胸の内で呟く。

「ふむ……。まだ若い偲が知つているそれを私が知らないのは森祭司として恥であるな……」

「そんな事はありません。若いとは言え偲様は様々な本を読み学ば

れている御方。aign様が知らない知識を得ていてもおかしくはありません」

煽つてゐるのか慰めているのかよく分からぬ事を言うイエローに、偲は目配せする。

「なるほど。偲君は好奇心が強いのか。それで冒険者になつたとか？」

「ええ、それで正しいですよ。ちょっと家を出ちやいました」

「蒼の薔薇のリーダーも似たような事をしていらっしゃいですね」

「ええ、それを聞いたのもあるんですね」

そう会話していく内、微々たる物ながら傀に対する評価が上がつているのを感じる。

知識に貪欲である事。それは冒険者には必要な事だからだ。

(その点、ユグドラシルと似てるのかもな)

何はともあれ、策がはまつて良かつたと、傀は拳を握る。

会話が一区切りついた所で、ペテルが依頼の終わりを切り出した。

「——さて、傀。教える知識はこれで終わりで良いかな?」

「そうですね。でも、知識が足りない時があれば、もう一度依頼をかけるかもしだせませんが」

「そんな事が起きたら、俺らが今回の依頼でシクつてたつて事だから、無料で教えてやるぜ。いいだろ、ペテル」

「だな。じゃあそういう事で、傀」

「ありがとうございます!」

「結構早く終わっちゃつたけど、依頼とか受けてる?」

「あー、いえ」

そう言いながら、傀は組合から借りている相談室の窓を見る。日は未だ真上に座しており、まだ依頼を受ける余裕があった。

「ダメだぜー。用事があつても、それが短く終わりそうだつたら朝に一応依頼を受理しておくもんだ。そうしないと時間が無駄になる」

「なる」

「どうする? 僕らはさつき言つてた『討伐』の任務を受けてるから、それに参加するかい? 確か、ダンジョンだけで森林とかは行つてないんだつたよね」

「そうですね。確かに、ダンジョンだけだと冒険者人生味気ないですし、それに参加しましようか」

「お、じゃあ噂を確かめるいい機会だな」

「ルクルツト、そういうのは言わないのでおきましょうよ」

「じゃ、ウルを呼び出しますね。△伝——」

と、傀ははつとする。傀は戦士として売つてゐるのだ。噂を知つてゐるだろう四人の前で魔法を使うのは不味い。

「め、<sup>メッセージ</sup>〔伝令〕のマジックアイテムを使つてくれませんか、イエロー」「かしこまりました」

苦し紛れに隣の人物に振つてしまつたが、そこはやはり交渉術に長けたイエローだ。実はそんなマジックアイテムなどイエローは持つていないので、上手く対処してくれる。

パントマイムかのように何かを持つたような素振りをしながら、普通に魔力系魔法詠唱者として〔伝令〕を行使した。パントマイムもおそらく傀が見破つてゐるだけで、幻術でも使つてゐるのだろう。

「マジックアイテムをそんな事に使うとは」「さすが貴族様は違いますね」「おいご本人の前で貴族嫌いを發揮するな」「ルクルツト、お前もやめろ」とか声が聞こえるのだから、それは間違いない。

『やつほ。上手くいった?』

唐突に声が聞こえた。ウルの機密司令か。<sup>シーケレットコマンド</sup>機密司令によつて傀、ウル、イエローが魔法的な糸電話で繋がる。

『ウル、傀様にそのような口振りは……』

『うつせ。本人がそう決めつけたんだから良いだろ。それに船員が船長に文句言うなよな』

『だから……!　いや、これは私が間違つてゐるな。すまない。傀様だが、それはそれは素晴らしい知識の入手方法だったよ。途中、冒険者からの評価を上げるよう誘導もなさつたし、本当に素晴らしいね』

イエローが言つているのはポーションの時の件だろう。だが、あれは傀も冷や汗ものだつた。なんせ、傀が思いついて行動したというのもあるだろうが、ああも取るのに難しいボールをイエローか投げてよこしたのは、つまりところイエローが傀を信頼してゐる証だ。つまり、息が詰まる。

『若い年齢で、あのような頭脳をお持ちだとは。稀代の才能をお持ちに違ひありません』

『イエロー、お世辞はちょっと、止めてくれませんか……』

実際、僕にとつてこれはお世辞だった。というのも、僕は場馴れしているだけなのだ。

確かに、この世界の成人は十六歳からで、現実世界の成人は異世界より上ではあるが、現実世界での就職を行う年齢は十六歳よりはるかに下だ。

僕だつて、小学校高学年程度から学業と共に仕事を始めた。無論、それは僕の家に経済的余裕が無かつたという理由からではなく、小学校で「お前、仕事してねーのかよー、おくれてるー」とか言われたからだつたが。

それが今役に立つてゐるのだから人生というものは分からぬ。からかつてきた生徒には今でもむかつ腹が立つが。

『いえいえ、そんな意図はございませんよ。とにかくウル、首尾は上々だつた。そして、依頼をしたチームと共同で別の依頼をこなす事になつから、組合に来い』

### 『ヨーソロー』

機密司令が切れる。切れて氣づいたのだが、機密司令は音が他の人間に聞こえないという点で伝令とは違う。四人には違和感を与えたがつただろうか。まあ、イエローが幻術でなんとかしてくれてるか。

「では、ウルが着くまで、準備でもしましようか」

「そうですね。でも僕らは整つてます。そちらはどうですか?」

「僕様。それは私がやつておきます」

「ですか？ ならお願ひしま——」

「失礼します。僕様、ご指名の依頼が来ておりますが……」

僕は耳を疑つた。

\* \* \*

「僕様にご指名の依頼がございます」

そう言う受付嬢と共に部屋に入つてきたのは一人の少年だ。僕と同じ位の年齢に見える。

その少年の名前はンフィーレア・バレアレ。その名前は先程僕がニニヤやダンから聞いた名前だ。彼のような薬師は城塞都市工・ラン

テルとあう戦略拠点においては高い地位を確立しているらしい。その中でもひときわ有名な彼では尚更の事だつた。

「指名依頼か……。でも、今契約してゐる依頼で僕は初めて森に行く予定だから、後日にしたいかな」

その言葉に”漆黒の剣”的視線が集中する。ダインの「僕、結構自由であるな」という呟きを僕は無視した。

「あ、それなら丁度いいと思ひますよ。というのも、森へ薬草の採取に行くのに警護をしていただきたいんです。その依頼と兼ねる事は出来ませんか？」

「お、なら丁度いいじゃん、僕君。モンスターを殺しながら薬草とりにいこうぜ。レンジャー野伏ドルイドと森祭司ドクターナイフもここにいる訳だし」

「うむ。ルクリットの言うとおりである！」

「そうですか？ なら、そうしようかな……。あ、ンフィイーレア。なんで僕に依頼したんだ？」

ちなみに、僕がンフィイーレアにタメ口なのは、初めてこの世界で同年代に会つたために、できるだけ仲良くしたいからである。

「そうですね。宿屋での話を聞いて……。あれ？ 赤髪の人はどうされました？」

「今こつちに来てる所だね。ウルに宿屋つて、ああ、あれ？」

「ええ、蹴りで男性冒険者の足を折つたとか」

”漆黒の剣”的顔が引きつる。今から会う人物の危険性を冒険者的に勘で探知したらしい。

「今まで雇つっていた方々が別の街へ行つたようとして、新しい方に警護を頼みたかつたんですよ。それに、ダンジョンでの噂も聞きまし

たし」

「なる」

「納得いただけた所で、依頼は受けてもらえますか？」

「とりあえず僕、こつちと一緒に依頼を受けるつて事でいいか？」

「はい、大丈夫です」

僕の鋭敏な感覚はその後のンフィイーレアの呟きを聞いたが、それを聞いた所で僕は何も思い出せはしなかった。

「それに、久しぶりにカルネ村に行くしね……楽しみだ」

\* \* \*

アジトに広がる邪悪な旋律に、新しく不安を煽るような音程の狂つた鼻歌が重なる。邪悪な鼻歌と比べ、狂つた鼻歌はそこまでの印象を人には与えない。

カジットは機嫌よく鼻歌を流すクレマンティーヌに対し不快げに切り出す。

「いと美しき旋律を邪魔するでないわ。だが、おぬしのその態度を見るに——もしや、見つかったのか」

「いやいや、見つかってないよー」

なんだ、とカジットは肩を落とす。期待まではしていなかつたが、そうであれば己の利益となつただろうに。

「だが、それではなぜおぬしは機嫌がいいのだ。ひねた稚児のようなおぬしが何もしないとは、嵐の前触れのような恐ろしさがあるわ」「ひつどいなー。見つかつたのはカジッちゃんのコネのおかげなのにー」

「コネ……。かの狂信者共の事が？ そこまでの効果は見込んでいなかつたが……。それに、見つかつたとは？ 本当に適合者が見つかつたのか？」

「カジッちゃんはせつかちだなー。『適合者は』見つかってないよー」

「要領を得ない解答をするものだな。はやく答えないと追い出すぞ」「わかつたわかつたこたえるこたえるー。いやあ、薬師のババアに、孫がいたでしょー？」

「なに？」

「あいつの生タまれながらの才能、素晴らしいね。丁度私達の為に生まれてきたんぢやない、あいつ？」

「ふむ……。一考の余地がありそうだな」

## 旅路 1

エ・ランテルから森に沿つた東に進む。護衛任務なのにモンスターの出る可能性が高い森に沿つて進むのは、モンスターを道中倒していつての報酬狙いだ。

傀達のチームが強い事を確信しているらしい漆黒の剣による選択である。彼らの視線がウルの方を向いていたのを傀は覚えている。なんというか、ウルの方が有名になつてしまつてる感があつた。

ブリタに自らの強さはいくらか見せたのだが、やはり庭ノイ小人ムを討伐するだけでは足りないのだろうか。じゃあ、ウルはなぜ二つ名までもらつているのか。ウルに聞いてみても笑つて答えてくれないし。

ウルの方を睨んでみると、ウインクで返された。

「それにしても、傀のチームでは魔法詠唱者マジックキヤスターがいないのであるな。ウル氏が拳メインの修行僧モンクで、傀が剣士マジックキヤスターであると」

「だよなー。傀君、魔法詠唱者じゃないまでも、遠距離攻撃使いはいるべきだぜ。戦士と修行僧だけってのはな」

肩を組んでくるルクルットが、傀にはうつとおしく感じた。どうやら子分みたいに思われているらしい。

「そうですね……。もつと仲間とかが必要なのかな。できれば魔法詠唱者がいいですけど」

「まー、でもすぐには見つかるんだろうな。魔法詠唱者つてけつこう狭き門らしいぜ？ 習得も時間かかるし」

「そうなんですか？ ニニヤさんは結構若いけど……なる、生まれながらの異能か」

「そうですよー。僕だつて師匠に声をかけられなければ今だつて魔法詠唱者になつてなかつたでしようから」

「例えば、僕が魔法詠唱者になるとかは？」

「かなり難しいんじやねえか？ 魔法詠唱者になると年単位だぜ？」

「世界への接続、だつたつけか」

世界、という言葉に目を開けそうになる。ユグドラシル時代での癖だ。あのゲームでは、世界という名前を持つ物は必ず何かしら特別な

意味を持っていた。

世界級アイテムや、僕が就いているワールドチャンピオンなどだ。ルクルツトは魔法を習得する方法、としてその言葉を言つていたようだつたが、何か関係があつたりするんだろうか。この世界の世界級アイテムとか。

そういうのを探す意味はあるかもしれない。

「だから、戦士だとしてもスリングとかは持つておくべきだよ。僕だつて持つてるし」

「なるほど」

ペテルにそう答えていると、歩いているウルがちらちら馬車の方を向いていた。

「僕、ウル氏は何をしておられるのだ？」

「多分、馬車に乗りたがつてるんだと思いますよ」

「疲れているのか？ そんな風には見えないけど」

「いや、あいつの趣味です。あいつ、乗り物に乗るのが好きなんですよ」

飛空艇の船長だからとそう設定したのだが、こう言つてみると子供みたいだ。

「そ、そうであるか……」

aignさんのが少し小さくなつていたのも多分、それのせいだった。

\* \* \*

僕が常時発動型特殊技術（パッセンジング・システム）による第六感で森のモンスターを察知してからしばらくして、一行の内一人が口を開いた。

「来たな」

ルクルツトの言葉を聞き、全員が構えを取る。僕も、だ。僕自身の意思ではなく、気づけば体が勝手に動いているのだ。

この世界に来てからなのだが、戦士としての特殊技術のせいか、こういった戦闘時の動きが補正されている気がする。本能のように戦士的な動きを体が勝手にしてくれるのは楽ではあるし怖くもある。そんな事を考えていると、森からモンスターが出てくる。

人食オい大鬼ガと小鬼ゴブリンだ。

「どう動きますか？ 敵を半分ずつやつしていくつて話でしたが」

「そうだな……これまで聞いてこなかつたけど、傀。参考までに、君はどれくらい強いの？」

ペテルの質問に傀は少し迷い、嘘をつく必要もないかと本当の事を言う。

「……ウルより上です」

「ええ？ それって本当か、傀君」

ルクルットが疑惑の声を上げる。今まで話してきた中で傀が嘘をつく性格ではないのは知っている。だが、万一小事があつた。

「本当ですよ？」 というか、本人は言つてくれないんですけど、ウルつてなんでそんなに噂になつてるんですか？」

「ええつと……」

漆黒の剣のメンバーが、ウルの方を覗き見て、沈黙する。

「本当に何をしたんだ……。ま、そうですね。僕らが二人で攻勢に出るので、皆さんはすり抜けたモンスターからンフィーレアを守つてくれません？」

「それは……」

「大丈夫ですよ。この剣の数々が見かけ倒しじゃない事を見せてやりますよ」

言うと、やはり心配なのかペテルが傀の顔をじつと見る。

彼らからすれば貴族のボンボンが無理な挑戦をしてるよう見えんのだろうな、とペテルを見返すと、傀は気づく。

ペテルの顔には汗が滲んでいた。装備によつて疲れや眠気が存在しないから傀は何も感じないだけで、人の身でこれだけの距離を歩けば元の世界の傀ならかなり疲れていただろう。

「……汗が一切出でないな。分かつたよ傀、そうしよう。戦況が悪くなつたら逃げてくれ」

傀と同じ事を考えていたのか、ペテルがそんな事を言つてくれた。

リーダーの人望は素晴らしい物らしく、それに対し不平の声は上がらない。

「……じゃあペテル、どう戦う?」

「こつちに来るモンスターの数がある程度不明瞭だから、いつも通りの手でいこう。僕、そつちは支援魔法はいる?」

「あ、い——」

「俺はいらんぜ。その魔力は別に回してくれ」

「……僕もいらないです」

僕の狙いとして、今回の戦いで自らの評判を立てたいと考えていた。そんな時で、ウルが支援魔法を知らないと言えば、僕もいらないとしか言えなくなる。

その空気を見て、ニニヤが僕へ心配そうに語りかける。

「僕、意地張つて無理しないで下さいよ」

\* \* \*

ルクルツトが弓矢によつてモンスター達を引きつけるのに合わせ、僕とウルは群れへ直進する。

ウルは群れの手前で胸を張つて歩いているオーガへと向かう。俊敏なその走りはモンスター達の進行を遅くするのに十分な威圧だった。

そしてウルは、その勢いそのままにドロップキックをかます。受けたオーガは胸をへこませ、血を吐き、一瞬で絶命した。

拳での戦いがメインなのではなかつたのか、という突つ込みも無いではなかつたが、漆黒の剣はあまりの筋力に感嘆の息をこぼす。

ウルにとつては、せつかく腹を貫かないよう手加減したというのにオーガの吐血が体を汚した事に不満げだつたが。

そして、僕は——と、視線を向けると、漆黒の剣の面々が、今度は絶句した。

その光景を見て驚くのは第一にそのスピードだ。あまりに速い進行速度で、僕は群れで最後尾のオーガへと向かう。

だが、漆黒の剣が絶句したのはそれが原因ではない。

なによりも僕の動きは、流れるようだつた。それも、見ている人間に違和感を抱かせない程に。

現に今僕は、群れのゴブリンの頭上を走つているというのに、ゴブ

リン達は悲鳴一つあげていない。隣のゴブリンが脳髄を踏み潰され絶命していても、鮮やかな動きはモンスターに気づかれてすらいなかつた。

そして目標のオーガに近づくと、最後のゴブリンを踏み抜いてから、偲は地に足をつく。そのオーガの様子をほとんどの者は見る事ができなかつたのだが、ルクルツトは見た。偲が地面に降りる寸前、オーガの左胸に切れ込みが入つたのを。

オーガが倒れ、そしてやつと群れが異常を探知する。気づくと、まず先頭のオーガがやられている。二つ目に、何匹かのゴブリンが頭を潰され死んでいた。

そして。

「偲君？」

ルクルツトが呟く。仲間が彼を見るより先に、群れから何匹ものゴブリンの首が中空へ跳ねた。

「あの一瞬で、ゴブリンの首を跳ねたのか……？」

ダインの言葉に、ルクルツトは頷く。

手前にいるウルの動きも凄まじいが、奥の存在がなしたらしい結果は、全てが常軌を逸していた。

「なるほど……。ウルさんより強いというのも、分かりますね」「つーか、ちょっと待て。群れがこっちに来てないか？」

後ろにいる存在に怯えたのか、モンスター達の群れはさらに速い速度で進みはじめた。命の危険まで感じているのだ、その加速は尋常ではない。ウルが捌き切れなくなつていた。

ンフィーレアの乗る馬車を守る為、漆黒の剣は前に、出た。

彼らはこの日、死に物狂いで戦う者達の恐ろしさを知る。結果として、"漆黒の剣"達の鎧は何箇所かへこんだ。

## 旅路2

ハンマーを鎧に叩きつけ、へこみを直す。反動で手が痺れるが、すぐに治った。また叩きつける。切り上げると、目の前の面々に作業の終了を告げた。

「まあ、応急処置ならこの位でいいんじゃないでしょうか」

「おお……」

竈の前で行つた鍛冶師の真似事は、いくらかの反響を得られたようだつた。一番大きな声は意外な事にウルの物。少しの間、共に過ごして、こんな事が出来るとは一つも思わなかつたからだろう。

モンスターの群れを倒した後、チームの四人は傀の強さを口々に褒めてくれて、傀の自尊心を満たしたが、チームの前衛の装備はボロボロだつた。

自らの強さを分かりやすく示す為に傀はあるののような行動に出たのだが、それがそのような結果を生んだのだ。罪悪感を感じて、鎧の修理を申し出るのも当然の話だつた。

勿論、成人するかしないかの少年が修理を出来ると簡単に信じるほど前衛二人は武器に対して軽率ではない。その為に見られながらの修理になつたが、次第に人数は増え、なんだか見世物のようになつてしまつた。

「すごいね……。戦士じゃなくて鍛冶士としても優れているのか」

「いや、ンフィーレア氏。もしかしたら他の技能もあるのかも知れないのである」

「魔法を使いたいという話でしたが、そこまで多芸なら、本当に出来るんかもしれないんじゃないですか……？」

「そんな事はありませんよ、ちよつとやれる事が多いだけです。鍛冶だつて修理ぐらいしか出来ませんもん」

これは事実だ。というのもこの鍛冶だが、かなり特殊な方法で傀が取得している高級武器職人の特殊技術グレイターエポンスマス（武具修理Ⅲ）による物だからだ。だから逆に、鍛冶系特殊技術はこれ以外持っていない。

「修理だけでも、冒険にはかなり便利である！」

ダインはそう言つてくれるが、彼の鎧を直す途中、修理特殊技術と同じ方法で手に入れた破壊者<sup>ブレーカー</sup>の特殊技術を間違つて使いそうになつてちょっとヒヤヒヤしたのは黙つておこう。

特殊な方法とは、ある職業による物なのだが……と、僕は続く声に意識を向ける。

「そういえば、あの動きつてどうやるんだ？　僕に出来るかは分からないが、教えてくれよ」

あの動き、と聞いて僕は「あ」と少し沈黙する。何回か話されてやつと分かつたのだが、あの動きとは僕が小鬼<sup>ゴブリン</sup>の上を歩いた時のらしい。なんでも、彼らには音がないというか、人に気づかせない動きのように思えたらしい。

僕は別に特殊技術を使つたつもりはない。確かに暗殺者系の特殊技術も持つてはいるが、その特殊技術は直接攻撃系の〈急所攻撃〉と〈致死攻撃〉<sup>デスマタック</sup>と〈迅速な死〉<sup>スワифト・デス</sup>だけだ。

だが、その動きは何によるものか、僕は既に予想していた。おそらく

く――

(僕の探知防御だろうな)

僕の探知防御用装備は神器級<sup>ゴッズ</sup>アイテムである。これはユグドラシリプレイヤーの中でかなり珍しい。

というのも、ちょっとしたレアドロップアイテムとしてある程度探知防御をしてくれるアイテムは出てくる為に、それで済ませるプレイヤーが多かつたのだ。実際、ワールドアイテムや神器級アイテムによるバフなしでならそのアイテムの探知防御は破れなかつたし、僕以外のギルドメンバーもそれで済ませていた。

だが、ワールドサーチャーズという、以前大戦争で情報の重要性を知ったワールドサーチャーズのギルド長は違う。ギルド長の役割として僕にギルド内情報の管理という仕事が新しく増えたし、このアイテムをギルド総出で作る事にもなつた。

(実際、組合で顔が一切覚えられてないのを見るに、立つてただけで顔がおぼろげになつてゐただからな……。この世界に来てから

だけど、ここまで来るとむしろ不便だ)

実験の余地はあるが、前は探知系の能力を防ぐだけだったのが、視覚や認識能力まである程度防ぐようになにかで効果が変わったようだつた。

しかも、戦闘行為をしても探知防御が和らがないようにするデータクリスタルの効果もそのままだ。だからあのような、ゴブプリンを何体か倒しても異状に気づかれないとかいう意味のわからない事が起るんだろう。隠密に特化した暗殺者職がユグドラシルでそんな事をしていた事もあつたが、まさかそれレベルの事がこの装備で出来るようになるとは思つていなかつた。

(まあ、そんなのが効くのもレベルの低い相手ぐらいだろうけど)つまり、やり方をペテルに教える事は一切できない。が、拒絶する訳にもいかないと、僕は嘘をついた。

「武技ですよ。オリジナルの」

「へえ……」  
嘘をついて、武技か、と僕は戦闘中でペテルが使つていた武技を思い出す。

確かに、〈斬撃〉と言つていただろうか。やつてている事を見るに、特殊技術とあまり変わりない物のようだつたが、僕も取得する事ができるのだろうか。（星に願いを）（星に願いを）なら強引に取得もできそうだが――。（それなら、経験値がたまつた時に何をするか決まるな。さつきのモンスターの群れで大体稼げた気がするし）

「おーい、俺が準備してる間に目を楽しませやがつて。飯できたぞー」

\* \* \*

スプーンをすくい、冒険者組合から支給されていた食事を口の中に入れる。不味さに顔を歪めたのを他の人物達に見られ、一行を笑わせてしまつた。

「いやあ、やつと貴族っぽいところ見させてくれたな。やつぱこういうのキツイのか」

「耐性がないみたいな言い回しやめて下さい。皆さんより舌が肥え

てるんですよ

「はは、言うであるな」

笑つて流されるのに少し腹が立つが、僕は現実世界では学校にも行っていた。そのままだつたら大学にも入れただろうから、あの世界での貴族というようなポジションでいたのは間違いないのは事実だろう。

ただ、冗談で食べてみた緊急避難用食糧よりもまずいのはどうかと思う。それとも、技術的に仕方がないのだろうか。今まで宿屋の食堂ではなく露天などの食事で済ませていたから、この世界のちゃんとした食事のまずさに気づかなかつた。

（ファーストフードが現実世界と似たような味なのはなんなんだろうな……。他のプレイヤーが広めたのか？ そうだとしたらすごい馬鹿げた事してるけど）

まあ、やはりダンジョンの方がいいなと僕は結論づける。食事もこんなまずい物を食べなくて済むし、それに延々とモンスターを倒さず歩く事もない。

「……貴族様はさすがですね」

とかニニヤが小さく呟くのが僕の鋭敏な感覚には聞こえた。漆黒の剣の他のメンバーは慌てるが、表情の変わらない僕に安心している。

何か貴族に恨みでもあるのだろうか。実際、ある程度他のメンバーとは仲良くなつた気がするのだが、ニニヤとはかなり距離を感じた。そんな事が起こり得る事はこのようなロールプレイを行うにあたつて想定していたから、僕は気にならないが。

むしろ反応した方が『漆黒の剣』の他のメンバーに悪いのだろう。もうちよつとおちよくつてみたい気もするが。

『漆黒の剣』のメンバー同士が何か囁きあつてているのを横目に、ンフィーレアが僕に話しかけてくる。

「馬車から見てたけど、なんというか、凄まじかつたね。走りもすこい速かつたし」

「そう？ まあ、健脚には自信があるんだ」

天使というのは弱点という弱点が少ない種族だ。種族的な耐性もかなり高く、ステータスではスピードが高い。他のステータス値はかなり微妙だった上、そもそも素早さはユグドラシルでは微妙ステータスとして名高い為、釣り合いは取れている。

ちなみに、ンフイーレアにもタメ口を要求しておいた。僕がこの世界の同世代と仲良くなりたかった為である。もしかしたら、このまま現実世界に帰れないかも知れないのだから。

「健脚？ 貴族つてそんな走らなきそつなイメージだけど」

「王国は、そうちらしいねー」

僕は陽光聖典や漆黒の剣、特にニニヤが語り聞かせてくれた王国の現状を思い出す。

権力抗争が激しく、腐敗した政治。悪魔崇拜がはびこり、悪い治安。

「へえ、その黒髪、この国の人じやなかつたんだ」

「え？ ああ、うん」

なぜそこに食いついてくるんだと思ったが、彼が自分に依頼した理由を思い立つ。

話が終わつたのか、漆黒の剣が会話に戻つてくる。

「いやあ、急に仲間内だけで話しててごめんね」

「ペテル、なんの話してたんだ？」

そんな事を聞くなよと思うが、ウルの顔から、ああわざとだと確信する。

そんな性格悪く設定したつけかと思うが、NPCが設定者の性格を受け継ぐのだろう事は分かつていて、共同制作した0リットルさんの性格なのだろう。彼もこんな性格ではなかつた氣がしたが。

「内容は分からぬけど、そんな長く話して、仲がいいんですね」少しピントのずれた言葉だつたが、それが四人を安心させたらしかつた。

「そうですね、まあどこも同じ感じだと思いますよ、命がかかってるんですし。あと目標が同じなのも。ほら、昼に言つてたあれですよ」

「ああ」

僕はペテルの腰にある柄をちらりと見る。

「あと、異性がいないのもな！」

(ん?)

ルクルツトの言葉に傀は小首を傾げた。異性がいないつて、どう視みても――。

「チーム、ねえ。なあ、傀とかはどうだつたんだ?」

「あれ、傀もチームを組んでいた事があつたんですか?」

「ん、あ、ええ」

「ああ、俺に向かつて殴りかかりに来やがつたんだぜ、あいつら」  
飛空艇のボスで、一回殺された事もあるウルだが、記憶があるらしい。

「へえ? どんなチームだつたんだ?」

「そうですね……」

傀は野営地を見渡す。

魔法的な線はユグドラシルにないニニヤが使つた魔法〈警報〉アラームだし、野営の作り方は現実世界では行われようもない、この世界独自の最適化された物。やつている時は辟易したが、文化自体には、好奇心が刺激される。

そして、あのギルドはそれを重んじた。

「そのチームの始まりは、ある一人の有名人でした。こつちでは有名ではないんですけど、彼はそこではとても有名な配し……まあ、別の事で有名だったんです。で、彼を中心に入れ人が集まり、チームの方針も彼によつてすぐに決まりました」

傀は、ギルド長になつた今でも、人格の出来た彼をクラン長と呼んでしまう。

「なんだろ、『冒険者』? ほら、組合の依頼に『冒険』つてありますよね。そんな事をして いました。ある人は魔法を探求して、ある人は鍛冶のなんたるかを研究するとか。地図とかの作成は当然のごとくしてましたね。ダンジョンを何度も発見し、侵入しては未知のアイテムをたくさん見つけました」

「ほおー」

「まあでも、そんなギルドだつたからかな。すごい変な人ばかりで

した。皆勝手にあつちこつち行くんですよ。それで、メンバーやの中で一番普通だからと、僕がリーダーに選ばれました。本当ですよ？」

驚いたような面々に、くすぐったいような笑いをしてしまう。実のところ僕の年齢は、ユグドラシルでの外装通りだ。それなのにリーダーに選んでくれたのには別の理由もあると僕は思っている。

「まあ、リーダーだからと沢山資源や装備を回してくれたから、それも彼らの僕に対する優しさだと今なら分かります。ま、僕の思い過ごしなのかもしれないんですけどね」

彼らの支援があつたからこそ、僕の装備スロットは全て神器級装備——それも、アーティファクトや課金アイテムではなくデータクリスタルによる手作りの——で埋まっているのだ。僕という少年がゲームを楽しめるようにしてくれた。そういう事をしてくれるならもうちょっと好き勝手な行動を少なくして欲しかったが。

「まあ、ちょっと変でしたけど、いい人達でしたよ」

「……その方は、今どうされてるんですか？」

ニニヤの声が少し小さいのは、僕がずっと過去形で言葉を発しているからだろう。何かを察知し、しかしそんな質問が出来るのは、僕の顔に影がない為に違いない。

「ん……」

言うのを少し躊躇ってしまうのは、現実世界への未練だろうか。一ヶ月程異世界で過ごして、それでもまだこの現実を僕は受け入れられてなかつた。眠つて起きるたび、この世界が夢とならなかつた事を恨んでいる。

その空気に、ニニヤが慌てふためき付け加える。

「いやつ、言いづらいなら、言わないでも構いませんよ」

「いえ、別に彼らが死んだ訳じゃなくてですね」

なるほど、と思う。冒険者と言つたが、それは彼らにとつて命の危険がある職業だ。それで僕が影を作る理由は確かに、メンバーの死亡に他ならない。

「どつちかというと、彼らが僕の事をそう思つてゐるかもしませんよ」

「逆つて事か？ どういうことかわからんねえけどよ」

ルクルツトの言葉に、偲は沈黙で返す。ただ、夜空を見上げた。この気持ちは、他人である漆黒の剣やンフイーレアどころか、身内であるウルにすら理解できないだろう。

今頃、彼らはあの空戦ゲームを楽しんでいるのだろうか。一ヶ月経つたから偲の異常には気づいているだろうが、どうしようもないだろう。心配すらされないかもしれない。結局、ネットゲームでのチームメイトというだけの関係だ。

だけど、彼らと一緒にゲームをするのは楽しかった。だから――

「……帰りたいなー」

その小さな呟きは、沈黙が支配した野営地には大きく響いた。

「でさ、そこのダンジョンでは転移系の罠もあつて……」

「ええ!」

ンファイーレアが驚いたのに、傀も驚く。そこまで大声を上げる事だろうかと思うが、そういうえばこの世界では転移魔法はかなりの力がないと使えない部類の魔法だつた。そんな魔法を罠として使うのは、この世界での常識に照らし合わせてみればひどく驚くべき事なのか。

ただ、それは傀としても問題はない。話に食いついてくれるタネがあつてよかつたな、というぐらいだ。

「驚くだろ? しかもかなりダンジョンの作り、いやらしくてね」

「へえ、モンスターの群れの中に転移させられた、とか?」

「その通りなんだけど、女性はそれ以上だつたらしい。ゴキブリつて分かる? それが大量にいる中に転移させられたんだつて」

「ひい」

ンファイーレアの反応に傀は満足げな表情をする。実際の所、ユグドラシルというただのゲーム内でのダンジョン体験を話しただけなのだが、昨日の戦いをいまと同じように馬車の御者台から見ていたンファイーレアからはかなりの好感触を得られていた。

目元を隠す髪で分かりづらいが、その視線には尊敬さえ伴つている気がする。現実世界で例えるなら、かなりの才能を持つてるという事で有名になつた同年代の有名人に対する表情だろうか。

とりあえずある程度の説得力は得られたかな、と思い、傀はポケットからある物を取り出した。これがあつた為に、わざわざンファイーレアとの会話が他の四人に聞こえないよう、人間形態では使えない魔法の為にアイテムを消費したんだ。

「そんなダンジョンに行つて帰つてきた訳だから……こんなものも見つかつた」

「え? そ、それは!」

傀が出したのは赤いポーション。薬師における伝説という事らし

い物だ。

「ああ、折角この町で一番有名らしい薬師と会えたんだ、見せてみようと思つてね」

「……それを、売りたいって事?」

そう言わると僕は困つてしまふ。ユグドラシルポーションの価値を知つた時は宿屋でふつかけなかつた事を後悔したが、今はお近づきの印としてこれを渡そうとしているのだ。

これを無償で渡せばンフィーレアと親しくなれると僕は踏んだのだが、価値の高さゆえに無償での手渡しが不自然になるとは思つてもいなかつた。

「……別に、金には困つていないんだけどね」

「それも、そうか」

「どうか、そもそもンフィーレアはこれが目的で依頼したんじやないのか? 欲しがると思つたのに」

「……知つてたのか」

僕は肩を竦める。

「宿屋での話を聞いたつて言つてたからね。そうなのかもなつて。ンフィーレアの依頼はちょうどこれの価値を聞いた直後だつたから、流石に記憶力が弱いと言われてた僕でも分かるのさ」

「じゃ、じゃあ」

「うん、あげる」

僕が手渡すと、ンフィーレアは目を丸くした。

「う、売るんじやなくて?」

「さつきも言つた通り、金には困つてないしね。というかそれ、効果はそこまで強くないよ? 第二位階魔法。そんなの、市販ので買えばいい」

「……それなら、ありがたく受け取るよ。でも、そんな簡単に手放して大丈夫なのか?」

「繰り返すなあ。そんなに数が少ない訳じやないから、気にしないでいい。僕からすれば効果はそこまで高くないんだから、欲しい人が受け取るべきだ。これも貴族の務め、つてね」

「そりや、貴族さん様々だね」

拳をぶつけあつて、偲はンフイーレアとより親密になれたように感じた。

と、馬車の中にいるンフイーレアは周囲の光景を見て、何かに気づいたように、少し目を見開く。

「……もう少しでカルネ村だ」

「そうなのか？ なら、魔法を解除しておくから、皆に知らせないと」

「え、魔法って……」

「ああ、この話が聞かれないように防音してましたー」

「ええー？」

ふざけた用な口調でアイテムを見せる、ンフイーレアもおどけたような驚き方を見せる。

ウルと漆黒の剣が談笑している方へンフイーレアが到着を知らせると同時に、周囲を見渡した偲はここ辺りの光景を一度見た事があるような感覚に襲われた。思えば、カルネ村、という名前もどこかで見たような気がしていたのだ。

だが、偲が見た事がある地形は望遠鏡での光景と、あとは——と、想像に偲は顔を歪める。

そして、取り出した魔法地図の指す現在地を見て、その想像が当たつていた事を知るのだ。

\* \* \*

トカゲ  
蜥蜴トカゲが地中から顔を出す。蛇にも見える足のない姿を太陽の光へさらしながら、最近よく通つていた餌場へと進む。

蜥蜴にはその理由が分からぬけど、そこには最近、虫達がたくさん群がつていた。無論、蜥蜴が餌とするこの虫達にも警戒心という物は存在し、その闖入者を見て逃げ出すのだが、それでも逃げ切れなかつた虫を蜥蜴は食す。

そんな場所——カルネ村の村民達だつた死体が集められた場所で、ンフイーレアはすすり泣いていた。

虫が寄り付き、腐った匂いが漂う死体の山は、このような蛮行を

行つた犯人が死体を処理しようと集めた後、何らかの出来事があつて処理まではできなかつたかのように見える。

僕は喉から酸味がこみ上げてくるのを感じる。未だ白骨化はしていない為に以前の面影が見られる死体が、それはもうグロい。

村には住民が残つていなかつた。僕はガゼフ・ストロノーフの話で幾人か避難しているのを知つてゐるが、彼らのような避難民だつて今、生き延びているかどうかわからぬ。

他のメンバーは、野営地を探してゐた。村に泊まる事が出来なくなつた為だ。

ンフィーレアの護衛として僕は残された訳だが、本当にそれだけが理由なのだろうか。

僕は、短期間で少し親しくなれたからといって慰めるのを期待されていたなら、勘弁してほしい、と思う。

(こんなのは、どう慰めればいいんだ)

おそらく、村に親しい人でもいたのだろう。友人、さもなくば恋人とか？ だが、どちらにせよ僕は慰める言葉を持たない。

「復活…………僕は魔力系だから…………開発…………アンデッド…………」

だが、ンフィーレアのその発言は無視できなかつた。

「ンフィーレア」

「ああ、大丈夫——ではないけど。後追いとかはしないさ。それも臆病なだけかもしれないんだけど」

「そんな事は、ないよ。誰だつて死ぬのは怖いだろ。それに、ンフィーレアが死ぬ事を願う人なんて、この中にいない…………そうじやないのか？」

「そうだね。うん、ありがとう」

座り込んでいた彼の肩に手を置くと、その上にンフィーレアも手を置いた。

「……誰が、こんな事をしたんだろう」

瞳に暗い輝きをともしてンフィーレアが言つたセリフは、当然答えは期待されてなかつたろうが、それを聞いて僕は、これは正体を明かす事はできないと思つた。

陽光聖典は捕らえ、飛空艇で働く予定だ。傀が飛空艇に所属する事を明かせば、聖典まで辿り着かれる可能性もある。

友人としてある程度関係が進めば、傀の事情を共有できると思つていたのだが。

ただ、復讐の輝きもその目から失わせ、ンフイーレアは立ち上がり、傀と改まつた調子で対面した。

「傀、僕を仲間に入れてくれないか？」

「……どうして？」

傀には本当に彼の言葉が分からなかつた。

「僕は、エンリを守れなかつた。僕は村を守ろうと考えられる程強くなかつたし、それにこんな事になるなんて想像もしてなかつた。今

のままじや駄目なんだ」

エンリとは誰なのだろうと傀は考える。発言からしてただの友人でも無いよう思えた。そして、そんな人が殺された無念も、転移してかなり変質したように思える傀の精神であつても、強く感じ取る事が出来た。

「こんな事になつて、同じままじや居られないんだ。強くなつて、もし同じ事が他の場所で起きたのなら誰かを守れるようになりたい。だから、傀——君の強さを僕に少しでも教えてほしい。荷物持ちでも何でもするし、僕は第三位階までの魔法や生まれながらの異能もある。だから！」

生まれながらの異能と聞いて、傀は驚く。生まれながらの異能に関しては、とある伝承がある為に公表する者は少ない。

生まれながらの異能を誇示し、見せびらかした者は、とあるアンデッドに目をつけられて魂を抜かれるとか。傀としては夜の口笛かよと思つたものだが、この世界ではかなり信じられている類の伝承であるらしく、生まれながらの異能持ちである事を知られた人物はほとんどいない。

それは、ンフイーレアの本気を裏付ける話だろう。

彼が語るのは、傀にはまるで死んだ人に囚われた道のように感じられた。だが、それで彼が悲しまずに済むのであれば、と傀は頷いた。

「分かった。今日この日から、僕らは仲間だ」と。

## 森の賢王

「……何があつたんだよ、傀?」  
「どういうこと?」

首を傾げたのは傀だけのようで、質問をしてきたウルだけでなく漆黒の剣四人も同じ思いらし。彼らの態度からそれを読み取れるぐらいの対人能力は傀も持っている。

「俺はこうも思っていたんだ。今回の依頼は打ち切られるんじやないかって」

「それは、村がやられていたから?」

「村が滅びてる事をどつかに報告するとかあるだろうから、まあそれもあるんだろうけど、一番はンフイーレアだよ。……なんか、事情があるみたいじゃん?」

「みたいだね」

傀がそう言うと、ウルは肩を竦める。事情とやらを知っている物と思つていたらしいが、傀もそこまでは聞けていなかつた。

「特別な関係の村人でもいたのかな」

「それは知らんが、薬草を取るようなモチベーシヨンはなくなつたと思つてたんだけどな。なんか、すぐ立ち直つてやがる」

何をしやがつた? と聞いてくるが、傀は特別何かをしたつもりはなかつた。だが、納得が行かないルクルツトが割り込む。

「何もしなかつたはないだろ。そんな気丈な少年には思えなかつたしなー」

「そうですか? 胸に何か秘めてなければ少年とは言えないでしょう」

「お、名言いただきました」

「まあ、傀が分からならなら……」

「ああ、あとウル、ンフイーレアがうちのチームに入ることになつたよ」

「……へえ?」

### 「彼の要望」

それが立ち直った原因かもな、というウルの言葉に、漆黒の剣も得心した顔をする。傀もそれを否定しない。

だが、それと同時に、罪悪感を感じたかもしぬなかつた。ンファイーレアによる要望もあつたが、それより傀は、友達が欲しかつた。これは自分の欲望から来た選択なのではないか、ンファイーレアの事を考えていないのでないかと、考へてしまう。

(……復活という手はなかつた。村人のレベルでは復活に耐えられないようだつたし)

傀が額を弄りながらそう考へていると、ルクルツトが場の暗い雰囲気を払拭するかのように別の話題を切り出す。

「そういや、傀君。『森の賢王』って覚えてるか？」

「……ああ、あれですか」

森の賢王は、依頼で聞いた知識の中にあつた。

「もしかしたら、いや、間違いなく傀に襲いかかってくると思うぜ」「それだけの強さを、傀は有しているのである！」

「はは、ありがとうございます」

「来た時の為の作戦を立てる必要があるだろうな」

「ペテルさん、それはうちのチームに任せてもらえませんか？」

「どうして？」

「新しく加入したメンバーの強さを把握したい物でね」

ンファイーレアを指でさす傀に、漆黒の剣達は困つたようにうなづいた。

「本当は依頼主を護衛するはずだつたんですけどね……」

「分かつた、ただ、危なそうな時の為に、後ろから援護する準備ぐらいいはさせてくれ」

「分かりました」

傀はうなずきながら、考へる。

(森の賢王……一体、どんな生き物なんだろう?)

\*\*\*

一行は森の入口へと入る。

僕にはあまり目新しい光景ではないが、アーティスト外の貧民層であれば感嘆したかもしれないぐらいに、森は美麗な光景だった。

そこで最終チエックも終わりかけ、これから採集を行おうといった頃合いだ。

ンフイーレアがカバンからしなびた薬草を出す。

「今回僕が採集したいのはこういった形をした物です。見つけたら教えてください」

「シングナクの草か。僕君は分かるか？」

「あー、はい。……知つてますね」

「なんで他人事？」

僕は答えない。というのも、そのシングナクとかいう薬草の事を知っている事が自分でも意外だつたからだ。  
(これが、この世界での知識系特殊技術か)

こういつた特殊技術がどう作用するのか疑問だつたため好奇心の解消に僕がスッキリしている間に、既に最終チエックが終わつていた。

(ユグドラシルでは特殊技術入手と共に百科事典<sup>エンサイクロペディア</sup>ヘデータが記入される程度だつたけど、自然と頭の中に入つてくるようであれば特殊技術の有用も高くな——)

「えっ！」

「僕、早く行きましょう」

ボーッとした僕を戻したのはニニヤだつた。恐らく強く込められたであろう力で背中を叩かれる。

漆黒の剣の他メンバーはちょっととしたふざけあいのように見えたかもしれないが、僕が見たニニヤの目はそんな希望的観測を塗りつぶしてくれる。

「驚かせないでくださいよ……」

そう呟きながらも、少し失敗したかもな、と僕は感じた。朝の誰も起きてない時間、聞いてみたのだ。

『なぜ性別を明かさないのか』と。

恐らく「トゥルーシーイング眞実の目」の結果だろう。僕にはニニヤが女性にしか見え

なかつた。

聞いた理由は好奇心というそれだけだつたが、やはり好奇心は猫をも殺すらしいと僕は知つた。

猫で死ぬなら、人であれば苦しいだけの猛毒だとも。

まず、まるで僕がセクハラをしているかのような表情をされ。數十分間沈黙が続き。

ドスの効いた声音で他の人には黙るよう言われた。

「そうはいつても僕、依頼中は集中すべきですよ」

そしてずっとこんな調子だ。

怖い、気まずい。

目には見えない圧力がかかつてているような気がする。

そんな風に、薬草の発見もほとんど出来ないまま、時間が経つたと僕が感じた時。

特殊技術の感知が、巨大なモンスターを感じし。

僕はそれと戦うことになる。

森に来たる強者を狙うと語られる怪物、森の賢王と。

## V S ハムスケ

ルクルツトから森が騒がしいと聞いて、漆黒の剣と共に退避しようとしたンフィーレアを偲は引き止めた。

「ンフィーレア、戦闘準備して！」

「ええつ？」

「君の能力を知りたいんだよ」

「わ、分かつたけど、次からは先に言つておいて欲しいかな！」「知らせてなかつたのかよ……」

グダグダだ、と偲は自らの段取りの悪さを後悔した。

〈神の洞察〉は、既に敵の攻撃開始を察知している。

鋼鉄が樹木を打つたような音が聞こえ後ろを向くと、鱗で覆われた尾が樹木に巻き付いていた。

『なんだ、これ……？』とンフィーレアが言うより先に事態は動く。ブチブチと何かがちぎれる音とともに、根ごと樹木が引き抜かれた。尾はそのまま樹木を振り回し、それを防いだのはウルだつた。

「あらよ、と！」

ウルの掌底が風穴を開け、樹木を吹き飛ばす。日光を遮る樹木が一本なくなり、辺りは少し明るくなつた。

尾が引き戻され、尾の主が姿を表す——

「——いや、違う！」

氣付くと偲は前へ出た。そこへ、巨大な塊が突進してくる。その速度が尋常でないのは、魔獸の脚力だけでなく尾を引き戻す際のスピードが乗っているからだ。

樹木が引き抜かれたのは振り回して攻撃する為でなく、ただ尾を引き戻す力と魔獸の体重が凄まじかつた為でしかない。

ワイヤー・アクションかよ、と偲は考えながら、巨大な塊の勢いに抵抗し、遂にはそれを押し留める事に成功した。

「吹き飛ばされたのはノックバック耐性があつたからってだけか。僕以外の人にとっては強いんじゃないか？」

「賞賛と思つて受け取るでござる」

「……ござる」

その語尾から想起されるのはサムライだが、ナワバリに来た強者に必ず戦いを挑むという噂も相まって、辻斬りという単語が偲の頭には浮かんだ。

「それがしはハムスケ、人間らの言うところの森の賢王でござる！おぬしの名前を聞くでござる」

「ちよつと待つて、僕にはまだ君の胴体しか見えないから。顔を合わせて自己紹介しよう」

偲に見えるハムスケの体は白銀の体皮だけで、その全貌は距離が近すぎる為に見えていなかつた。

後ずさつて いる間、偲はハムスケというその名が、ハムスターみたいだな、と気付いた。

名前だけだと、思つていた。

「完全にハムスターだ……」

「む？ ……さて、そろそろ名を名乗るでござる！」

その全貌を見た偲の呟きに対して一瞬、ハムスケが野生なりの鋭い視線を向けたが、偲は気づかなかつた。

「僕は偲だよ。こつちはウルで、それとンファイーレア」

「偲、でござるね。覚えたでござる！」

「でも、名前なんか聞く必要ないんじやないか？」

偲は抜いた剣をハムスケに向け、言う。

「だつて、今から殺し合うんだろう？」

「死ぬと思つたらそれがしも逃げるでござるよ？」

「……なるー、あの噂はそういう事だつたのか」

森の賢王という魔獣は森へ来た強者と戦いを挑み、その力が十分だと思えばそこから去るらしい、というのが偲の聞いた話だ。

その噂から、力試しに来る冒険者が後を絶たないらしいが、魔獣が野生の本能で逃げているだけと考へると……

「かなりしようもない話に思えて來たな。じゃあ、戦おう。君と戦うと組合での昇格点が入るらしいし」

「人間達の中ではそんなシステムができているでござるか……。で

はかかってくるでござるよ！」

獸にしては性格がいいんだな、と思いながらも、譲られた先手を偲は無駄にしない。踏み出した一歩は普段より軽かつた。

話している間、ンフィーレアが魔法をかけていたのだ。偲に時間稼ぎの意図はあまりなかつたが、抜け目のなきだけなら偲よりンフィーレアの方が冒険者だつた。

大上段から剣を構え、ハムスケの頭蓋を狙う。剣筋に尾が塞がるが、偲はそれを逆手に取り尾を地面に叩き付けた。ウルの攻撃を通して隙を作る為に。

「おお？」

「〈外皮強化〉でござる！」

だが、ウルの叩きつけた拳はハムスケを数歩後退させるのみだった。

「……武技か」

「すごいな森の賢王……。武技まで使うのか」

「特殊技術スペシャルなしの全力だぞこれ。こいつ結構強いぞ偲」「なる……」

そんな問答の末、偲は違和感に首を傾げた。

「ンフィーレア、モンスターが武技を使うなんて普通じやない……よね」

「そうだね……。修行つてやつかな？」

いや、と偲は顔を振る。ユグドラシルでは異形種の特殊技術を覚える難易度が高く、何よりわざわざ自分から特殊技術を覚える異形種がいるとは、この平均レベルの低い世界では考えにくい。

特殊技術という物が、この世界では現実世界と同じような、修練によつて習得できる物の延長線上にあるものらしいと偲は考えていた。「野に生きる獸が何か訓練を行おうなんて発想する……か？」

それよりは、誰かがハムスケに武技を教えた可能性の方が高いのではないだろうか。根拠はないが、偲は自らの直感が正しい事を確信した。

↑——剛爪↓

傀が考え事をしている間にも事態は動いた。ハムスケが鋭くとがつた前足の爪によつて斬撃を振りぬくのに、傀は転がつて回避する。

その俊敏さや攻撃力から考へると40レベルは届くだろうか。誰だか知らないが、ユグドラシルに居ないモンスターをよくここまで訓練した物だ。

「**〔斬撃〕！ でござる**」

ふと傀は自らの失敗に気付く。ハムスケが尾をウルに叩き付けたのが見えた。近くのウルを差し置いてハムスケが傀を引っかいたのは、地面に抑えつけられていた尾を自由にする為だった。

「……ウル？」

「なんて事ねえ！ くそてめえ、ぶつ潰してやる！」

なんて事ありそuddoと傀は歩を急ぐ。ウルはそもそも修道士としてのキヤラメイクをしていない。

森の賢王は強い。今のウルでは、その攻撃を無視できない程には。（シフィーレアも同じ事だ。とすると、僕以外に命の危険なく賢王と戦える奴はいな――）

「**〔酸の矢〕！**」

拳を握る傀の背後から魔法が飛んだ。

「**〔シフィーレア〕！**」

「……照準を定めてたんだよ。だから遅くなつたのは許してくれないかな！」

「許してやるからもつと魔法使え！」

「待てよウル。きっと僕らが邪魔で撃てなかつたんだ」

傀は自分が久しぶりに本格的なチーム戦をしている事を自覚した。（まずは敵を遠距離攻撃使いに近づけさせない。そして射線は通す。すっかり忘れちやつてるなあ）

「……なんの！ でござる！」

眉間辺りを少し酸で焼かれたハムスケは少し怯んでいたが、既に攻撃態勢に移つっていた。尾を槍のように動かし、傀を突く。

それを剣で受け止め傀が踏ん張つた靴の裏に、土の山が作られた。

「本当に、攻撃力は高いね。一番強い僕だから狙つたのかな。獸にそんな知性があるのか」

「けど、俺を忘れて貰つたら困るな、〈氣爆掌〉！」

「傀、避けて！ 〈酸<sup>アシッド</sup>の矢〉」

ンファイーレアの掛け声に転がつて避けた後、見てみれば二人の攻撃はハムスケに当たつていなかつた。

だが、事態は変わらず傀達の優勢だろう。数の利があるのはもちろん、ハムスケが傀へ異様な頻度で攻撃してくるのも理由だった。警戒されているのだろうか。この場で最も強いのは傀だから、それは間違いではないが……。

「火<sup>ファイア</sup>ボール」

ハムスケの体表にある紋様が一塊<sup>ひとかたまり</sup>分輝き、魔法が傀へ届いた。が、寸前で消える。傀のステータスによる魔法抵抗だ。

（モンスターの魔法か。いよいよユグドラシルらしい……）

「そろそろ、僕も攻撃させてもらおうか」

我慢ならないと傀は剣を振りかぶる。

傀の素早さがかなり高いのは現在の姿でも同じ事だ。ハムスケに迎撃の姿勢すら取らせずその攻撃は成功する。

そして、傀の脳内にハムスケの情報が流れ込んできた。

## 帰還

ハムスケの体表を裂いた剣を、偲は探知剣と呼んでいた。実際のアイテム名は違うが。

この剣は攻撃によつてモンスターの特徴を解析する。だからこそ、偲はその情報を取得した。

「……！」

「い、痛いでござる！ というか、痒い？ 気持ち悪い？ ありとあらゆる不快感が押し寄せてくるでござるよ！」

ブリタがこの剣を禍々しいと形容したのはその性質を察知したからだろうか、と偲はハムスケの悲鳴を聞いて考える。ダメージ耐性や状態異常耐性を確認するために、探知剣はあらゆる属性ダメージとあらゆる状態異常を攻撃に付与するのだ。

「そろそろ、終わつていいころじゃないか？」 賢王サマよお

「そ、そうでござるね……。貴殿らは十分な力を持つていてござる。ではさらば！」

「いや、待つてくれ」

偲は、ハムスケを引き止めた。先程の情報を有効活用する為に。

「君の主人に伝えろ——」

偲はンフイーレアが背後にいる事を確認してから、目を見開いてハムスケを凝視する。

「僕はまだ本気を出しちゃいないってね」

「……分かつたでござる。では！」

ハムスケは去つた。偲も一度目を閉じて、後ろを振り返る。

「とりあえず、勝利！ だね。これで薬草も気兼ねなく採れる」

「偲、最後のは……？」

「ハムスケは誰かに飼いならされてたんだ。それだけ」

『探知剣か？』

『うん。ウルには言つておくと、それだけじゃなくて。今の戦いは見られてた』

『あ？ どうやつて』

『ハムスケの目を通してだよ。気づけなかつたのは……。相手が高  
レベルの調教師ティイマーだったからかな。90レベルは、あるはずだよ』  
『機密司シーケレットコマンド令』の意味がなくなるくらい驚いたウルの顔に僕は焦つ  
てンフィーレアを見たが、幸いンフィーレアはそちらを見ていなかつ  
た。

「何してるの？」

頭を下げていた。

「ありがとう森の賢王。貴女のおかげで、村はモンスターの襲撃を  
受けなかつた。……でも、それもこれで終わりだ」

ンフィーレアが礼をしている方向が、ハムスケの去つた方向だと僕  
はやつと思ひ立つた。

僕の声はンフィーレアに届いていなかつたらしい。しばしの沈黙  
の後、ンフィーレアは顔を上げて、何事もなかつたかのように口を開  
いた。

「もう街に戻ろう」

\* \* \*

依頼主の指示で、漆黒の剣含む一行はエ・ランテルに帰還する。森  
の賢王が来るまでに十分な薬草が採れていた為に、賢王を引き寄せた  
僕も罪悪感を感じる必要はなかつた。

特にこれといった出来事もなく、街に着く。その頃には依頼の受理  
から四日も経つていたようだつた。

次からは街の外に行くような依頼は受けないでおこう。野営やら  
食事やらでかなりの精神的疲労に見舞われた僕はそう決意した。

十字路の中心で一行は立ち止まる。

「ここで分かれるんだつけ？」

「そうですね、ルクルツトさん。でも、本当にいいんですか？ 僕ら  
だけ組合に行つても

「森の賢王撃退という名誉の持ち主がそう臆病になる事はないので  
ある！」

「そうですかね……？」

依頼通りンフィーレアの家まで薬草を運ぶ漆黒の剣たちと違い、僕

とウルは森の賢王との戦闘を組合に報告する事になった。

明日でもいいはずなのに今日報告する理由は、血である。

「本当に森の賢王と戦つたのか知る為に魔法を使うなんて、組合も大げさですね」

「そんな事ないよ偲。いや、そう思えてこそ偲なのかな」

「なんですかそれ……」

「いいか偲、その血を一滴も落とすなよ？ 一刻も早く組合に行けよ？」 血の鮮度が落ちたら鑑定できなかもしれないからな」

剣に付着した血に魔法をかけ、賢王と本当に戦つたのか鑑定するらしいが、鮮度に関しては多分迷信だと、偲は思つても口にしなかつた。だからとりあえず、離れていく馬車の上に手を振る。

「ソフィィーレア、また明日」

手を振り返されて、自分でも意外なほど満足感を味わっていた事を、偲は明日知ることになる。

\*\*\*

「まだ帰つていないようだつたぞ」

「あーあ、最悪！ やつと見つけたと思つたのに、なんで肝心の生まれながらの異能持ちがどつか行つちゃつたんだろー。心当たりある？」

親しき友人の声に答える。

「薬草を取りに行つてるんじやないか。この店は天然の薬草で有名だ」

「もうー。私外国人だからさー、こここの店がそんなでもあんまし意味ないんだよねー。今日ぐらい私の為にいてくれてもいいのにー」「そうだな……」

「あ、でもそのタレントは私の為といつても過言じやないかも、やるじやん」

親友と雑談を楽しんでいると、鎧の男が部屋に現れた。

「来たぞ。バアさんはいない」

途端、女はおぞましい笑みを浮かべる。

## 白銀の冒険者

その日、偲は朝に起きなかつた。

森の賢王関連の手続きを終えて、宿のベッドに寝転んだ後、深夜、感知能力に引っかかる物がある事に気づく。それも、大量に。偲には感知系特殊技術スペシャルがあり、感知する範囲は装備で強化されている。街全体を覆うほどの広さの感知能力は、いつもある程度の人数、カルマ値が低い人間を感じていた。だからこそ偲は、すぐにそれに気づけなかつた。

（墓地か。物凄い量だな。召喚……？　いや、こんな量のモンスターをこの世界では召喚できるのか？）

「……ウル、行くぞ」

「オッケー」

「理由は聞かないのか？」

「その顔を見りや分かる。戦いだろ？」

そんな会話を経て、偲とウルは宿から出た。最近泊まりだした宿の為に偲はまだ周辺地理を理解していなかつたが、どこからモンスターが出現しているのかは感知能力を使わずとも分かつただろう。

「あっちか」

「行こう」

墓地の壁で起こっている騒ぎを見たウルの発言に、偲はうなずいて墓地へと歩いた。

「——え？」

が、足を止める。

「どうした？」

「……モンスターの反応がある」

「へえ」

驚く偲に対し、ウルは面白そうに笑いながら、その家屋の扉を蹴破つた。

「……そんな過激な行動に出るとは思わなかつた」

「じゃあ俺を責めるかよ」

「いや……」

僕はウルへの叱責より先に、事態の確認を急いだ。

「ここはンフィーレアの家だ。無事を確認しないと」

「よりにもよって、か」

焦る胸中と共に、僕は感知しているモンスターの方へ急ぐ。

「な、なんだいあんたら！」

感知した場所へ着く直前、老婆が突然の侵入者に驚く。

話に聞いた特徴からンフィーレアのおばあちゃんか、と僕は考えたが、彼との事情を今説明する必要はないだろう。

僕は扉を開けながら、老婆に話しかける。

「とりあえず、あなたが無事で良かった。モンスターがこの奥に——！？」

「な、なんじゃこりやあ！」

僕が開いた扉の先にはニニヤの顔があつた。僕へ魔法を放つ。

「アンデッド！」

戦闘準備をウルがする前に、僕はニニヤの攻撃をすれ違うように避け、振り返りざまに魔法を使う。

〔グレーター・ステータスリカバ〕  
〔上位状態回復〕

腐り落ちた筈のニニヤの肉は元に戻った。だが、様子がおかしいと僕はいぶかる。

「私を救ってくれてありがとう、僕。いえ、天使さ——」

「黙れ」

〈救世主〉で従属状態になつたニニヤが僕の言葉通り沈黙する。それが無性に腹立たしくて、僕は彼女への特殊技術を解除した。

「——あ。えーと、僕、今のは……。いや、それよりありがとうございます。奴らは……？」

気絶した所を介抱したという誤解だろうと僕は推測する。

「いや、僕らが来たときには誰も」

「そうですか……。隣にいるのはリイジーサンですね。僕、奴らの目的はンフィーレアさんです。さらわれてしましました」

「なんじやと！」

意味のわからない状況変化に戸惑っていたリイジーも、孫が危機らしいと知るや否や事態を重く見出す。だが、ニニヤは先に仲間の心配をした。

「aign、ルクルット、ペテル……」

ニニヤが向かつたのは彼らの横たわった肉体だ。

「また、か……」

ニニヤは軽口のように、だが藁にもすがるような口調で傀に問うた。

「傀、私みたいに皆も……」

「死体だな」

ピシヤリと切つて捨てるウルの物言いに、ニニヤは黙つてうつむいた。傀も「そんな言い方、ないだろ」とたしなめる。

「大丈夫ですよ。ウル、リイジーさんを連れてけ」

「傀、まさかだよな？」

「そのまさか、かもね……」

はあ、とウルはため息を吐く。

「全くもう、お人好しで困るね。天使さん」

ぼやきながらも、ウルは傀の命令通り、リイジーを連れて共に部屋を去つた。

「……傀、今彼が言つていたのは？」

「ニニヤさん、すみません。今まで嘘をついてました。僕は貴族の出じやないんです」

「……え？」

突然なぜそんな事を、と思うより先にニニヤは、場違いな身分蔑視の矛先を向けた事を思い出し居心地の悪さを感じた。が、次の言葉からそれも霧散する。

「ウルが言つたのは冗談じやない」

額を指差し、傀は〈集団蘇生<sup>マス・リザレクション</sup>〉を使用した。

三人の死体に天使の本能からか“哀れさ”を感じた傀は、種族を明かしながらも彼らを“救う”のに躊躇しない。

“漆黒の剣”の死んだ三人は、無効にした《救世主》の影響を受けずに正気でありながらも、突然の蘇生に戸惑つた。

そして、ニニヤと同じように偲の顔に浮かぶそれを見て驚く。

「……やつぱり、気づいてなかつたんですね。探知防御も、ここまでくれば認識阻害だな」

「本……当……に天使なんですね。三つも、目を持つてゐるなんて」  
彼らが見ていたのは偲の額にはりついた、見開かれた第三の目だ。  
これこそが偲の半人形態。人間形態での魔法を使えないデメリットが消滅した姿。

「口外はしないでくださいよ。あなたがたに見せたのは魔法を使える説明のためですけど、宗教の強いこの国じや知られると騒ぎになりそ——!?」

「……なんで！」

偲は驚く。ニニヤが偲の肩をつかんで、叫ぶように語りかけてきたのだ。「え……？」

「なんでツ！ なんでですか！ どうして祈つても祈つても来てくれなかつたくせにつ、今さら！ 死者を蘇らせられるなら、今すぐ姉さんを取り戻してくださいよつ！」

「な……」

貴族の子供という設定はまだしも、天使という種族さえ他人からよく思われない可能性など想像もしていなかつた。

だが、彼女の告白を見て、自らの知りえない情動に偲は、異世界の人気が現実世界と同じく、生きた人間である事を再確認させられた。

「……ニニヤさん、手を離してください。これからあなた達を死なせた人に、天使からの罰を与えに行きます」

答えにはなつていなかつた。だが偲はそう答えるしかなかつた。

「皆さん、これからウルについていつてください。モンスターが都市にはいっぱいいます。彼が安全な所に行かせてれますから」

ニニヤがだらしなく手をぶらさげるのを見て、偲は部屋の外に逃げるよう歩く。

\* \* \*

ウルに仕事を押し付けた事で怒られるだろうかと考えていると、廊下の曲がり角で、ウルと鉢あわせた。

「……ウル、リイジーさんは？」

「ソフィーレアを探しに家を回つてゐるよ。見つからないだらうな。それで？　どうした」

「……ウル。『漆黒の剣』を飛空艇に届けてやつて。そこが一番安全だ」

「乗りモン使えつて？　そりや嬉しいけどよ。それでそれで？　お前はどうするんだ？」

ウルはニヤニヤとした顔持ちで、偲の言葉をうながす。

「何つて……。『天使からの罰』を執行するよ。これをしたやつは僕の友達候補をさらつて、冒険仲間を死なせた」

「なる」

『漆黒の剣』を運ぶ時、注意しろよ。この世界は生まれながらの異能や武技もあるし

「まつ、分かつたさ」

それを聞き偲は出口へ歩み始めるが、その背中にウルは言葉を投げかける。

「なあ？　依頼でもないのになんで助けるんだ？」

「奴らは墓地にいる。探知が簡単にできただんだ……ムカつくんだよ」

偲が去つたあと、その言葉に一人ニヤリとウルはつぶやく。

「……なる。りよーかい、俺の創造主さまつ」

\* \* \*

軋む扉の音が聞こえるたび、おもむろにその場の悲壮感は強くなつていくようだつた。墓地の衛兵たちの顔は皆青ざめ、扉から目を背ける事もできていない。

視界外の情報は耳が感知した。金属音。

その冒險者は銀のプレートをつけていた。

衛兵達は彼がアンデッドの大群を討伐する希望から、止める事もできず、だがすぐに諦念を抱く。

海をも思わせるアンデッドの濁流に、一人の人間がどのように対処できるというのか。

見上げる先を見て、奇声が上がった。彼は、墓地の壁でも隠れない、無数の死体が作る巨大な死体の巨人と目を合わせていた。

そして、剣の名前を呼ぶ。

『神々の小剣』

トグロを巻いたヘビを思わせる形状の剣が、高級そうなソードベルトから呼び出される。呼び出された白い剣は浮かび上がり、彼はそれを手の平で押した。

一陣の風が吹いたと思えば、浮かんでいた剣がなくなっている。

「チャチだな。こんなので死ぬなんて」

その声に巨人を見た衛兵は、モンスターの塊に空いた巨大な穴を見過ごさなかつただろう。

「門を」

「な……、あ、開けられる訳がないだろう！ 向こうにはアンデッドの大群がいる上、第一……、子供じやないか！」

ひとまず眼前の危機が去り、その見た目をようやく衛兵は認識できた。

「そうですか」

冒険者は取り合わない。助走もしない跳躍で、墓地の門を乗り越える。信心の深い衛兵は、その跳躍に翼の音を聞いた。

彼の持つ白い短剣は、いつの間にか鞘に収まっていた。

彼が跳躍ののち落ちていく間も、アンデッドは発生する。先程の死体の巨人、集合する死体の巨人は二体発生した。

粘りついた液体のように盛り上がり巨人を形作る死体を、落下する冒険者はたやすく崩壊させる。

衛兵は超人以上の特殊技術に崇拜に近い感嘆をこぼした。

「な、なんだあいつ……」

「救世主だよ。アダマンタイトの器だ……」

「銀のプレートに白い剣……いや……」

その冒険者は白銀の布鎧に身をまとった。

だから、白銀の冒険者と呼ばれた。